僕と幼なじみな新任教師？

まあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕と幼なじみな新任教師？

【Ｎコード】
Ｎ８２３０Ｘ

【作者名】
まあ

【あらすじ】
バカとテストと召喚獣の二次創作小説です。文月学園に１人の教師が赴任しました。新任教師『久島蓮夜』は常識から逸脱している生徒達がそろう文月学園でどんな生活をするんでしょうか？

オリキャラデータ

久島蓮夜（クシマレンヤ）
年齢：２４
性別：男
備考
吉井玲・明久姉弟の幼なじみであり、現在は玲と結婚を前提とした付き合いをしているが玲の希望で明久には玲との関係を話していない。大学時代に玲とともに海外留学をしており、教育過程を取得している。
学生時代はケガで引退するまで空手の全国常連者であり、成績は地を這っていたがケガをして無気力になっていた時に親身になってくれた福原慎教諭や多くの先生達のようになりたいと教職を目指す。
また、教職を目指す前の生活態度はＦクラスに近いものがあり、時折、常識から外れた行動が見え隠れしている。
人当たりがよく、昔は明久を玲の魔の手から守る事も多々あった。
そのため、蓮夜にとっては明久は今も昔も手のかかる可愛い弟であり、明久も蓮夜には頭が上がらないようである。
得意教科は海外留学を生かした英語。留学先で専攻していた保健体育だが苦手教科があるわけでもなく、Ｆクラス担当の臨時教師と言う事もあるため、西村教諭と交代で全教科を担当。召喚フィールドも全教科に対応する事が出来る。
基本的には向上心は強く、自分の授業以外は他の教師陣から専門的な事も聞いており、成績は向上中。赴任早々に船越先生に目をつけられるが上手く交わしている。

第1問（前書き）

毎度、おなじみのまあです。
『思いつき』の昇格です。まだやるのかよ。他もあるのにいい加減にしろよと言う声も聞こえますが気にしない方向でお願いします。
思いつきで書いた時と設定が変わってきます事をご了承ください。

第1問

「久島蓮夜ね。高校は進学校、大学時代に海外留学経験あり？……」

久島蓮夜は文月学園の教師に空きが出たと知り、採用試験の内容を電話で問い合わせたのだがその日に学園に来るようにと言われ、現在は文月学園の学園長室で『藤堂カヲル』学園長の前に立たせられている。

（……何か居づらい）

蓮夜は広い学園長室に2人っきりであり、居心地が悪そうにしていると、

「あんた、大学で留学までしておいてどうして教師になろうとなんて思ったんだい？　この成績ならあっちで就職先なんていくらでもあっただろ」

「それは、高校時代に恩師とも言える先生に出会えたからです。そんな先生のようになりたいと思いました」

「……今の時代、そんなの流行らないさね」

「そうかも知れません」

学園長は蓮夜の学歴でこの学園の教師を希望する理由がわからないようで首を傾げると蓮夜は少しだけ照れくさそうに笑い、学園長は蓮夜の言葉にため息を吐くが蓮夜の答えが気に入ったようであり、

「採用さね。今日から働いて貰うよ。廊下で待ってな。誰かに案内させるから」

「採用？　今日から？　へ？」

「何だい？　何か問題あるのかい？」

「い、いえ、すいません。いきなりすぎて頭が処理できていませんでした。あ、ありがとうございました」

学園長は蓮夜を採用すると笑うと蓮夜は採用試験を受けたその日に同格通知が貰えるとは思っていなかったようで間の抜けた表情になると学園長は楽しそうに笑い、蓮夜は１度、深呼吸をして自分を落ち着かせると学園長に向かって深々と頭を下げ、

「そうだ。久島先生、あんたには２年Ｆクラスの副担任と授業全般を受け持ってもらうからね」

「え？　担当教科は英語でと言う話でしたが」

「あんたの能力ならできるだろ。それにうちのＦクラスは特殊でね。西村先生だけだと人手が足りないんだよ。それがあっての採用試験だしね」

「そうですか。わかりました。それでは失礼します」

学園長は蓮夜にかなりの無茶な条件を言い渡すが蓮夜はあまり気にした様子もなく頭を下げると学園長室を出て行き、

「……まさか、こんなに有能な人材が転がってるとはね。良い拾い

ものだったね。能力が履歴書通りだったら、正規も考えてみようかね」

学園長は蓮夜の背中を見送ると蓮夜の第1印象で有能だと判断したようでくすりと笑うと、

「……高橋先生、あたしだよ。さっき、採用試験を受けたのを採用したから、誰か案内を頼むよ。名前は久島蓮夜だよ。履歴書を見る限りと印象では有能みたいだからね。正規雇用も考えているからしっかりと頼むよ」

「久島蓮夜ですか？」

職員室に内線をかけ、『高橋洋子』教諭に蓮夜の案内を頼むと電話の先の洋子は蓮夜の名前に何かあるのか首を傾げる。

「ん？　知りあいかい？　あぁ、そう言えば同じ大学だったね」

「そうですか。あの、久島くんがですか。わかりました」

学園長は洋子の出身大学が蓮夜と同じだと思いだしたようで学園長からでた言葉に洋子は蓮夜が自分の知っている人間と同一人物だと理解したようであり、

「案内の件、わかりました」

「ん。それじゃあ、頼むよ」

学園長は洋子に蓮夜を任せると内線を切る。

第2問

「……学園祭の準備期間なのに野球か」

「懐かしいですか？　久島くん」

蓮夜は廊下の窓から野球をしている生徒達を見て苦笑いを浮かべると彼の背後から一見さえない地味な男性が声をかける。

「ふ、福原先生！？　お久しぶりです」

「はい。久しぶりですね。久島くん……いえ、久島先生と呼ばないといけないでしょうか？」

蓮夜は振り返るとその男性は蓮夜が教師を志すきっかけになった恩師である『福原慎』教諭であり、慌てて頭を下げると福原教諭はかつての教え子が成長した姿を見る事が出来た事が嬉しいようで柔和な笑みを浮かべ、

「えーと、福原先生に先生と呼ばれるとなんか気恥ずかしいですし、それに俺は臨時職員ですし、長居もできるかはわからないですからなれている方が良いです」

「ダメですよ。久島先生、生徒の目もありますから、学生気分では困ります」

「は、はい！？　って、洋子先輩？　きょ、教師になっていたんですか！？」

蓮夜は苦笑いを浮かべて『くん』付けで良いと答えようとするがそんな彼の考えを否定する女性の声が背後から聞こえ、慌てて振り返るとそこには大学時代の先輩である洋子が立っており、蓮夜の態度では生徒に示しが付かないと言いたげである。

「はい。久島先生の受け持つ2学年の学年主任をやらせていただいています。Fクラスはいろいろと大変だと思いますがお互いに協力して行きましょう」

「学年主任？　本当ですか？　その若さで」

「文月学園は生徒に限らず実戦主義ですから、能力のある人が上のポストにつけるんですよ。久島先生も頑張って臨時職員ではなく、正規職員になれるように頑張ってください。学園長先生も期待しているようでしたよ」

「は、はい。尊敬する福原先生や洋子先輩と同じ学校で教鞭を振るって行けるなら、どんな事でも努力します」

洋子は慌てる蓮夜の様子にくすりと笑うと蓮夜は他の学校ではありえないであろう人事に顔を引きつらせるが福原教諭は蓮夜にも努力をすれば正規の職員にもなれると蓮夜を応援すると蓮夜は大きく頷き、

「久島先生、昔、言っていた尊敬する先生と言うのは福原先生なんですか？」

「はい。福原先生です」

「そうですか」

洋子は蓮夜の様子に以前、彼が話してくれた恩師の事を思い出したようで蓮夜が大学時代と変わっていない事に昔を少しだけ懐かしんでいるのか柔らかい笑みを浮かべると、

「久島先生、学園の案内は私と福原先生で受け持ちます」

「よろしくお願いします」

「はい。それとですね。生徒の目もありますから『先輩』は止めるように」

「わ、わかりました。高橋先生」

洋子は蓮夜が昔と変わらない事に安心したようでくすくすと笑うと蓮夜は慌てて頭を下げ、

「それでは行きましょうか？　案内が終わったら西村先生にFクラスを紹介していただかないといけないですしね」

「はい。よろしくお願いします……あの、学園長先生も高橋先生もFクラスは大変だって言ってましたけど、何かあるんですか？」

「……久島先生、それはおいおい話をしましょう」

「高橋先生、視線を逸らされると不安しか感じないんですけど！？」

福原教諭は蓮夜の案内を済ませようと歩き始めると蓮夜は自分が受け持つ2年Fクラスの話を聞こうとするが洋子は蓮夜から視線を逸らす。

第3問

「それでは、久島先生、行きましょうか？」

「はい。西村先生、よろしくお願いします」

学園設備の案内が終わるとFクラスの担任の『西村宗一』教諭に引き継ぎをされてこれから授業を受け持つ事になるFクラスへと向かう事になる。

「久島先生は臨時職員を続けていたと聞きましたが、どうして正規の職員にならないんですか？」

「なかなか、タイミングが合わなくて後は私以上に有能な先生はたくさんいますから……西村先生、さっきも見てはきたんですけど、旧校舎の方は酷いですね」

蓮夜は西村教諭と少し話をしながらFクラスの教室に向かうのだがFクラスの教室のある旧校舎に足を踏み入れると新校舎との違いに苦笑いを浮かべると、

「まぁ、文月（ウチ）学園のカリキュラムでは仕方のない事なんだが」

「実戦主義ですか。それでも、ここまで酷くなると逆にやる気が失せませんか？」

「……久島先生、文月（ウチ）学園の生徒はそんな人間ではないんですよ」

「そうなんですか？　それをバネにできる生徒が多いなんて教えが

いがありそうですね」

「……いや、そっちの意味ではないんだ。そうであればどれだけ良いか」

西村教諭は召喚システムと言う特殊なカリキュラムの影響だと苦笑いを浮かべると蓮夜はこんな環境下でも勉強に取り組む事ができる勤勉な生徒がそろっているのだと考えるが西村教諭は眉間にしわを寄せる。

「そっちの意味ではない？　って事はどう言う事ですか？」

「まぁ、見ればわかる。少し待っていてくれないか？」

「はい。わかりました」

蓮夜が首を傾げた時、Ｆクラスの教室の前に到着したようで西村教諭は教室の中から聞こえる騒ぎ声に大きくため息を吐き、

「みんな、清涼祭の出し物は決まったか？」

「今のところ、候補はこの３つです」

教室のドアを開けると生徒達は清涼祭の話し合いをしているようで少し間の抜けたような男子生徒とポニーテールの女子生徒を中心に話し合いをしているようで女子生徒は西村教諭に話し合いで出た清涼祭の出し物の候補の３つを見せる。

「……補習の時間を倍にした方が良いかも知れんな」

（あれ？　……ひょっとして、明久か？）

西村教諭は黒板に書かれている３つの候補を見て大きく肩を落とすとＦクラスの生徒は西村教諭がため息を吐いた理由を『吉井』と言う男子生徒に責任を押し付け始め、蓮夜はその男子生徒に視線を向けると彼の顔に心当たりがあるようで首を傾げた時、

「馬鹿者！！　みっともない言い訳をするな！！　先生はバカな吉井を選んだこと自体がバカな行動だと言っているんだ！！」

「あ、あの。西村先生、それは言い過ぎじゃないでしょうか？」

西村教諭は生徒達が責任を１人の生徒に押し付けた事を叱りつけるがその言葉はどこかおかしく蓮夜は教室に入ると苦笑いを浮かべて西村教諭を止め、

「あ、あれ？　レン兄？」

「アキ、この人と知り合い？　って言うか、誰？」

男子生徒は蓮夜の顔を見て驚きの表情をすると女子生徒は男子生徒の制服を引っ張り、男子生徒に蓮夜の事を聞く。

第4問

「やっぱり、明久か。大きくなったな」

「ん？　久島先生は吉井と知り合いですか？」

「レン兄、先生ってどう言う事！？　って、頭を撫でないで！？
僕はもう小学生じゃないんだから！？」

蓮夜は男子生徒の反応に彼が幼なじみの『吉井明久』だと確信したようでくすりと笑うと彼の頭を撫で、その様子を見て西村教諭は首を傾げる。

「ん？　悪いな。どうしても昔の印象ってのは変わらなくてな。西村先生、明久は俺の幼なじみなんです。明久の両親は共働きですし、よく家にも遊びに来ていましたので」

「そうなんですか？」

「あのね。印象は変わらないって言っても、レン兄が大学に進学してからなんだから、7年も経つんだよ。僕は高校生なんだから」

蓮夜は苦笑いを浮かべると自分と明久が幼なじみだと話し、明久は変わらない年上の幼なじみの様子に安心しながらも流石に小学生扱いされている事に大きく肩を落とすと、

「あ、あの。西村先生、そちらの久島先生と言うのは？」

「あれ？　明久、あの子って、お前の小学校時代の友達だよな？」

「う、うん。そうだけど」

1人の女子生徒が西村教諭に蓮夜の事を聞き、蓮夜はその女子生徒に何か心当たりがあったようで明久に女子生徒の事を聞き、明久は頷く。

「そうだよな。名前は確か……瑞希ちゃん、姫路瑞希ちゃんだ。明久の……」

「レン兄、いきなり何を言うんだよ！？　姫路さんに失礼だろ」

蓮夜は昔の記憶を引っ張り出すと明久は蓮夜の口を塞ぎ、

「なるほど、そう言う事か？」

「そ、そう言う事って、どう言う事だよ！？」

「まぁ、気にするな。兄としては弟がしっかりと成長している姿を嬉しく思っているだけだ」

「……久島先生が吉井と知り合いなのはわかりましたが、一先ずは生徒達に紹介させて貰います」

蓮夜は明久の様子に1つの答えを導き出したようでくすりと笑うと西村教諭は蓮夜を一先ず、生徒達に紹介しようと思ったようで蓮夜と明久の間に割って入ると、

「今日から俺以外にFクラス専属の教師を置く事になった。それがこの先生だ。久島先生」

「はい。久島蓮夜です。今日から皆さんと一緒にこの学園でお世話になる事になりました。今は臨時職員としての採用ですのでいつまで君達を受け持てるかはわかりませんがよろしくお願いします」

西村教諭は蓮夜を生徒達に紹介し、蓮夜は自己紹介をすると生徒達に向かって深々と頭を下げる。

「久島先生、俺は生徒指導の方もあるので、クラスをお願いします。このバカどもは目を放すと野球をしたり遊び始めますので」

「あ、さっき、野球をしていたのはこのクラスですか」

西村教諭は蓮夜に生徒達を任せると言うと蓮夜は苦笑いを浮かべて頷き、

「ん。そうだった。お前達、クラスの設備の事なんだが、清涼祭の稼ぎを設備向上に使っても良いと学園長先生から話があった。だから、少しは真面目に取り組むように、それでは久島先生、よろしくお願いします」

「はい。わかりました」

西村教諭は学園長から清涼祭の売上を酷い設備の向上に使っても良いと許可をもらった事を生徒達に伝えると教室はざわざわと騒ぎはじめ、西村教諭は真面目にやる気になった生徒達の様子を見て一瞬だけ表情を緩ませるが直ぐに表情を引き締めると蓮夜に生徒達を任せて教室を出て行く。

第5問

「それじゃあ、俺は見てるから、話し合いの続きを」

「久島先生、まとめてくれるんじゃないんですか？」

「えーとですね」

蓮夜は窓ぎわに置いて教師用のパイプ椅子に腰をかけようとすると明久と一緒に話し合いをまとめていた女子生徒が蓮夜に助けて欲しいのか声をかける。

「島田、島田美波です」

「島田さんだね。すいません。今日、面接を受けていきなりだったから生徒の名前も全然でね」

女子生徒は蓮夜が自分の名前を知らない事に首を傾げた後『島田美波』と名乗ると蓮夜は苦笑いを浮かべ、

「学園祭は生徒のものだからね。教師である俺が口を出すより、みんなで話し合って決めた方が思い出に残ると思ってね。暴走しすぎると少し方向を正せて貰うけど、今はちょっと早いかな」

「そうなんですか？」

「あぁ。それにこの3つの名前は明久が考えただろうから、仕方ないとしても3つとも面白いと思うよ」

蓮夜はまだ教師である自分が口を出す事ではないと笑うが、

「ちょっと、レン兄、僕だから仕方ないってどう言う事！？」

「……なるほど、幼なじみの久島先生がこう言うって事は明久は昔からバカだったと言うことか？」

「雄二！！　どう言う事だ！！」

明久は蓮夜の言葉に声をあげるが1人の大柄の男子生徒のつぶやきに相手を変えたようで男子生徒を怒鳴りつける。

「あ？　そのままに決ってるだろ。バカ久」

「上等だ。表出ろ。バカ雄二！！」

明久と『雄二』と呼ばれた男子生徒はにらみ合いを始め出そうとするが、

「ケンカはしない」

「「あだ！？」」

蓮夜は持っていたメモ帳で2人の頭を軽く叩くと、

「レ、レン兄、何するんだよ」

「明久、お前は島田さんと一緒に意見をまとめないといけないんだろ。後は」

「……『坂本雄二』」

蓮夜は2人の様子にため息を吐くと男子生徒はあまり清涼祭の興味無いのか明久とのにらみ合いを邪魔された事につまらなさそうな表情をして名前を名乗る。

「坂本雄二？　……えーと、確か、クラス代表だね」

「あぁ」

蓮夜は西村教諭から説明を受けているのか雄二がこのクラスの代表である事を確認すると雄二は小さく頷き、

「そう。とりあえずは落ち着く。今はクラスのみんなに迷惑がかかるから止めなさい」

「……止めるのは今だけなのかよ」

「学生時代の友人とはケンカも必要だからな。いじめや行きすぎたものじゃない限り、そこまで強くは言わないよ」

蓮夜は明久と雄二に一先ず、ケンカを止めると雄二は蓮夜がケンカ自体は悪い事と思っていないようで眉間にしわを寄せるが蓮夜は気にする事もなく、

「そ、それは放任過ぎないでしょうか？」

「そうでもないと思うよ。ケンカくらいしないと痛さってわからないだろ。それを知らずに人をナイフで刺しましたとかよりは殴り合いでケンカをした方が清々しい」

瑞希は蓮夜の言葉に苦笑いを浮かべるが蓮夜はケンカはした方が良いと言い切り、

「……おい。明久、久島先生って体育会系か？」

「……うん。高校2年の時にケガで引退するまで勉強なんかしないで本気でマンガで無敵の流派を倒すって言ってた。小学校時代から空手で全国常連」

「……」

雄二は蓮夜の言葉に明久に耳打ちをして蓮夜の過去を聞くと明久から聞かされた事実に顔を引きつらせる。

第6問

「それじゃあ、明久、島田さん、続きを頼むよ」

「はい。アキ、あんたも遊んでないで手伝いなさいよ」

「う、うん」

蓮夜は進行を明久と美波に任せると売上でクラス設備をあげる事もできると言う話に盛り上がり始め、

（……暴走しているな）

その暴走は蓮夜が教室に来る前に決まりかけていた3つの出し物以外にもあがって行き、蓮夜はその様子に苦笑いを浮かべると、

「レン兄？」

「静かにしなさい。何のために話し合いをしていたんですか」

蓮夜は立ち上がり生徒達に落ち着くように言うが静まる事はなく、蓮夜は明久と美波を少し遠ざけ、

「……お前ら、人の話を聞く気はないのか？」

教卓を蹴り飛ばすと教卓は粉々に吹き飛んでしまい、その様子に生徒達は何があったかわからないようで息を飲むと、

「良いか。島田さんと明久は君達が選んだ実行委員なんだよな。そ

れなのにその2人を無視して騒ぐなんてどう言うつもりだ？」

「「「……」」」

蓮夜は落ち着いた様子で生徒達に聞くが蓮夜の背後には何か黒いものが見え隠れしており、その様子に生徒達は驚いているのも重なっているせいか蓮夜の問いに誰も答える事はない。

「坂本代表！！」

「な、なんですか！？」

蓮夜は生徒達の様子に雄二を呼ぶと雄二は自分が呼ばれるとは全く思っていなかったようで声を裏返すと、

「……変わりの教卓を取ってきますので、島田さんと明久と一緒にみなさんの話をまとめておいて下さい」

「お、おう」

蓮夜は苦笑いを浮かべて教室を開けている間の事を雄二に頼み、雄二は代表としての責務も果たしていない事に怒られると思ったようで蓮夜の口から出た言葉に慌てて返事をし、

「それじゃあ、島田さんも明久もよろしく」

「は、はい！？」

「……レン兄、やりすぎだよ」

蓮夜は教室を出て行くと明久と美波は顔を引きつらせて蓮夜の背中を見送る。

「く、久島先生は怒らせると怖いのじゃな」

「……意外」

蓮夜が教室のドアを閉めると同時に教室の中に漂っていたおかしな緊張感は一気に緩み、一見少女とも間違えそうな少年『木下秀吉』と手に持ったデジカメを整備している小柄な少年『土屋康太』の2人が顔を引きつらせながら蓮夜の幼なじみでもある明久に視線を送るとクラスメート達も同じ事を思っているようで視線は明久に集中し、

「な、何？」

「明久、お前が知っている久島先生の情報を話せ」

明久は集まる視線に声を裏返すと雄二は明久の肩に手を置いて明久が知りうる蓮夜の情報を全て話すように言うが、

「な、何を言ってるんだよ。そう言うのはレン兄に直接聞くのが普通だろ。ぼ、僕の口からなんてひ、卑怯じゃないか！！」

「そうか。白状する気はないか？　と言うか、その反応を見ると面白い事が聞けそうだな」

「アキ、何を隠してるの？」

「……吉井くん、私にもわかるように教えていただけませんか？」

明久は蓮夜の事を話すと自分に都合の悪い事もあるせいか、後ずさりを開始するが瑞希と美波の背後にはなぜか真っ黒な気配が漂い始め、その様子を見て雄二は楽しそうに笑っている。

第7問

「で、何で、久島先生の話をするのをイヤがるんだ？」

「待て！？　雄二、この状態はおかしいから！？　まずは僕の足の上に乗せられているこの石を避けるんだ！？」

明久は対抗虚しくクラスメートに捕まるとどこから持ち出して来たかわからない石畳の上に正座をさせられるだけではなく、彼の足の上には石が積まれている。

「アキ、別におかしな事を聞いているわけじゃないでしょ。話しなさいよ」

「美波、おかしいのは話じゃないから、今、僕に起きているこの状況だから！？」

「なら、白状するか？　それなら、石は避けてやる」

美波は明久が蓮夜の事を話す事を嫌がっている意味がわからないとため息を吐くが明久にとっては問題はそこではないと叫び、雄二は蓮夜の情報を話すなら助けてやると笑い、雄二の意見に同調するようにクラスメート達は大きく頷く。

「……イヤだ」

「ムッツリーニ、追加だ」

「……了解」

明久は意地でも言いたくないのか視線を逸らすと明久の足の上にはもう1枚石が積み上げられ、明久の悲鳴が教室に響くと、

「吉井くん、そんなに久島先生の事を話したくないなんて、2人だけの秘密だなんて、不潔です！！　酷いです！！」

「ひ、姫路さん、何を言ってるの？　僕とレン兄でそんな事あるわけが！？」

「……なら、どうして教えてくれないのか、ウチ達に教えてくれないかな？」

瑞希は何かおかしな方向で蓮夜と明久の関係を考えており、明久が全力で否定しようとした時、美波の手により、明久の足の上の石は3枚になっている。

「……明久、幼なじみと言うのはワシらも知っておるのじゃ、簡単なプロフィール喰らいでも良いのではないか？　年齢とか」

「イヤだよ。そんな事を言っても、みんな、根ほり葉ほり聞く気だろ！！　……せっかく、レン兄が前みたく笑ってくれてるのに」

秀吉は明久が意地にならない程度の内容で良いと落とし所を提案するが明久はクラスメート達を信用できないようであり、声を張り上げた後、少しだけ悲しそうに目を伏せると、

「……高校2年の時のケガか？」

「な、何を言ってるんだよ。ぼ、僕はそんな事は何も知らないよ」

「……明久、お前、わかりやす過ぎだ」

雄二は少し前に明久から聞いた蓮夜のケガの事をつぶやくと明久はその言葉に慌てはじめ、雄二は大きく肩を落とし、

「それに関しては俺も聞く気はねえよ。流石にお前の様子を見れば深入りしちゃいけない気がするしな。俺はお前を地獄の底に叩き落としたいが、今のところは久島先生には何の恨みもねぇしな」

「何だと、それはどう言う事だ！！」

雄二は蓮夜のケガの話には触れないと明久の耳元でつぶやくが明久は雄二の言葉に文句があるようで雄二を怒鳴りつける。

「そのままだ。それより、早くしないと久島先生が帰ってくるぞ。久島先生がこれを見ると……この石も拳で割れるか？」

「さ、流石にそれはないと思うのじゃ」

「……あの様子じゃ否定できない」

雄二は先ほどの蓮夜の様子を思い出して、今の行動が自分達の首を絞めている事だと気づいたようで顔の血の気が引いて行き、クラスメート達も雄二と同じ答えに行きついたようで顔を引きつらせると、

「誰か、久島先生の足止めに走れ！！　このままじゃ、明久の足の上に乗っている石のように割られる！！　全力で証拠を消せ。島田、時間がない。３つから、多数決で決めるぞ」

「わ、わかったわ」

雄二は慌ててクラスメートに指示を出し、蓮夜が戻ってくる前に証拠を隠滅するために動き出す。

第8問

「……で、お前達は何がやりたかったんだ？」

「……誰だよ。姫路を足止めに行かせたのは」

蓮夜は教室に戻ってくると明久への尋問をしていると言う事実を知っているようで眉間にしわを寄せると雄二は蓮夜の足止めに向かったのが瑞希だったため、簡単にばれてしまったようで大きく肩を落とす。

「す、すいません。吉井くんと久島先生がとっても仲が良さそうでしたので気になってしまいまして」

「すまぬのじゃ。先ほどの久島先生の自己紹介では明久と久島先生が幼なじみと言う事しかわからなかったのじゃ、それで……」

蓮夜がご立腹の様子に瑞希と秀吉は慌てて蓮夜に頭を下げるが他の生徒に反省している様子は見えず、

「……だからと言ってもこの拷問と言う手段はないだろ。だいたい、こんな拷問器具をどこから持ってきたんだ？」

「そ、そうだよ。どうして、僕が拷問を受けないといけないんだよ」

蓮夜は怒りを通り越して呆れているようであり、大きくため息を吐くと明久は拷問を受ける理由はないと叫ぶ。

「それはアキが何かを隠そうとするからでしょ」

「……島田さん、その前に人の秘密を詮索すると言う非常識な行動を恥じなさい」

「は、はい。反省します」

美波は明久に責任転嫁をしようとする様子に蓮夜は大きくため息を吐き、

「だいたい、俺の事を聞きたいなら、本人に聞きにくるのが礼儀だ。それは周りに不信感を与える事にもなります。今は学生でノリでやっているのかも知れませんが社会に出た後に苦労する事になります。止めなさい。後は坂本代表」

「な、なんですか？」

「君は代表としてクラスをまとめないといけない身ですよね。それが率先するのはどうなんですか？」

蓮夜は雄二を見て雄二に代表としての行動ではないと言うが、

「知らねえよ。俺は明久が地獄に落ちる！？」

「他人の不幸を願うなら、それ相応の不幸が自分にも降りかかると思うように」

雄二と明久の関係は友人と言うには微妙であり、雄二は明久の事などどうなっても良いと言いかけると蓮夜からはチョークが雄二に向かって投げられると同時に雄二の頬に何かがかすった感触と後方の壁に何かが当たったような大きな音がし、生徒達が壁の方を振り返

ると壁に小さく焦げたような跡と一粒の欠片すら残す事なく粉々になっているチョークだったものが畳の上に落ちている。

「な、何だ！？　今のは！？」

「ただのチョーク投げです。教師とはチョークを投げるものです」

「た、ただのチョーク投げじゃねぇよ！？　威力がおかしいだろ」

チョークがかすった雄二の頬は小さな擦り傷が付き、血がうっすらと滲みだし、自分に何があったかわからないようで声を張り上げるが蓮夜は騒ぐ事ではないと言い切り、雄二は本来あり得ないチョーク投げの威力に立ちあがり声をあげて叫ぶと、

「坂本代表、あまり、うるさいと次は本気で額を狙って投げます」

「……」

蓮夜はこれ以上の威力があると伝えると雄二は身の危険を感じたようで顔を引きつらせて黙り込み、静かに自分の机がわりのミカン箱の後ろに正座をするとクラスメート達も今の蓮夜に逆らってはいけないと思ったようで静かに席に座る。

第9問

「……レン兄が居れば、僕はFクラスを我がものに」

「明久、おかしな事を考えるなよ。あくまで、今回は周りに問題があったからであって、昔から言ってるが、俺はお前の肩を持つだけじゃないからな」

「わ、わかってるよ。当然じゃないか！？」

明久は蓮夜が居れば自分はFクラスではやりたい放題だと考えたようで小さく笑みを浮かべるが蓮夜は明久の考えている事が手に取るようにわかるようでため息を吐くと明久は慌てて否定するが、

「……明久」

「すいませんでした！？　おかしな事を考えました！？」

蓮夜は明久の名前を呼ぶと明久は畳の上で土下座をして蓮夜に謝り、

「まったく、それで、坂本代表、島田さん、明久、清涼祭の出し物は決まったのか？」

「は、はい。あのままではまとまらないと思ったんで、最初の3つから多数決を取って」

「中華喫茶『ヨーロピアン』か？　……名前は考え直そうな。周りにバカだと思われるから」

蓮夜は清涼祭の出し物はどうなったかと聞くと美波は多数決を取った事を蓮夜に説明し、蓮夜は黒板に書かれた正の字が多い『中華喫茶』を見て名前の変更をするように指示を出す。

「ちょっと、レン兄、バカだと思われるってどう言う事だよ！？」

「明久、お前のせいでクラス全体がバカだと思われたらみんながかわいそうだろ」

「何を言ってるんだよ！！　このクラスは姫路さん以外、みんなバカだよ！！」

明久は自分が決めた名前では良くないと蓮夜が言うため、声を張り上げるが蓮夜はため息を吐くと明久はこのクラス自体が瑞希を抜かしてバカだと言い切り、

「……あのなぁ。俺が言うのもなんだけどな。明久、お前と同程度のバカはこの世に存在しないんだ。お前が誰かを『バカ』だと言うのは世の中の人すべてに失礼だ。みんなに謝りなさい」

「流石、幼なじみだ。明久のバカを理解してる」

蓮夜は明久の言葉はクラスメート達に失礼だと彼の肩に手を置いて言うと雄二は楽しそうに笑い、

「僕をもっと信じてよ！？」

「明久、俺はちゃんとお前を信じてる。どうせ、１人暮らしを始めてから、ゲームやマンガに仕送りを使い込んでまともな生活もしてないって、成績だけじゃないんだ。お前のバカさは魂に刻まれたも

のだから」

明久は蓮夜の言葉に声をあげるが蓮夜は首を横に振って明久に『事実』を伝えようとする姿に、

「……本当に久島先生は明久と会うのは7年ぶりなのかのう」

「……明久の行動パターンを読みきってる」

「す、凄いです。いつか、私も吉井くんの行動がすべて読み切れるようになりたいです」

蓮夜と明久が本当に幼なじみだと生徒達は理解したようで大きく頷き、

「みんなもその反応は酷いよ！？」

「明久、現実から逃げてはいけないぞ。それにお前は清涼祭の実行委員だろ」

明久は泣きながら教室を出て行こうとするが蓮夜は明久の首をつかみ、明久を止めると、

「それじゃあ、喫茶店の名前は後で考えるとして、簡単な役割分担を決めようか？　島田さんと坂本代表も前に出てきてまとめてくれ」

「はい」

「俺もか？　……面倒だな」

実行委員の明久と美波だけではなく、代表である雄二にも指示を出すが雄二はあまり清涼祭に興味がないように見える。

第１０問

「ん？　坂本代表はあまり、学園祭に興味がないみたいだな」

「あぁ。正直、興味がない。面倒だから、島田と明久に実行委員を押し付けたわけだしな」

蓮夜は雄二の様子に苦笑いを浮かべると雄二は蓮夜の様子から本音を言っても良いところだと思ったのか面倒だと言い切り、

「そうか、まぁ、やる気がなくてもやって貰わないと困るんだけどな。思いだしたんだけど、君って昔は神童って言われていた坂本雄二だろ。今はずいぶんとやる気をなくしているみたいだけど、君が中心になってくれれば、西村先生が言っていた設備上昇も簡単だろ？　それともそれくらいもできないで神童って言われてたのかい？」

「あぁ。当然だ。やってやろうじゃねえか」

蓮夜は雄二の名前に昔、聞いた噂を思い出して雄二の事を挑発すると雄二は蓮夜の挑発にプライドをくすぶられたのか口元を緩ませると次々とクラスの役割分担を決めて行き、先ほどまでの停滞していたのが嘘のように出し物の名前以外は決まってしまい。

「それじゃあ。後１０分は自習時間にしましょうか」

「その前に、久島先生に聞きたい事があるんですけど、もちろん、良いよな？」

蓮夜は早く話し合いが終わった事に残りを自習時間にしようと言う

が雄二は挑発された事の仕返しと蓮夜の情報を聞き出したいようでニヤリと笑うと、

「別にかまわない。名前は言う必要はないな。年は２４、血液型はＡ。身長体重は必要ないとして３サイズは必要か？」

「……レン兄、３サイズは聞いても嬉しくないから」

「そうか？　『玲』なら、必須だと詰め寄ってくるぞ」

「玲？　その人って久島先生の彼女さんですか？」

蓮夜は冗談交じりで自分のプロフィールを話し始めると明久は蓮夜の言葉にため息を吐くが蓮夜は明久の様子を見て苦笑いを浮かべて『玲』と言う名前を出すと瑞希は蓮夜の彼女だと思ったようで遠慮がちに聞くなか、男子生徒達は蓮夜に向けて殺意を上げ始めるが、

「や、止めてよ。姫路さん、おかしな事を言わないで！？　姉さんとレン兄がそんな関係になったら、僕はレン兄の幸せを考えて猛反対をするよ！！」

「姉さん？　アキ、あんたにお姉さんっていたの？」

明久は自分の姉であり、蓮夜の幼なじみの『吉井玲』を思い出したようで全力で蓮夜と玲の関係を彼女なんかではないと否定し、Ｆクラスの生徒は誰も明久に姉がいると言う事を知らなかったようで首を傾げる。

「明久、お前、玲の存在を隠してたのか？」

「そ、そりゃ、そうだよ。あんな、姉さんがいるなんて知られたら、僕は恥ずかしすぎて生きていけないよ！！」

「……明久、いくらなんでも言いすぎだろ」

蓮夜は明久が玲の事を隠しておきたい理由も何となくわかるようで苦笑いを浮かべるが明久の玲へ対する考えは蓮夜の想像をはるかに超えており、蓮夜は大きくため息を吐くと、

「そうすると、久島先生は明久の幼なじみではなく、明久の姉上の幼なじみとなるのじゃな」

「まぁ、そう言う事だ。玲が明久にいたずらをして泣いた明久が良く家に逃げ込んできていたぞ」

「……明久、お前の姉って何なんだ？」

「……言わないでよ。泣きたくなってくるから」

生徒達は蓮夜と明久の関係より、明久の姉である玲の方に興味が移り始めた時、授業終了の鐘が鳴り響き、

「それじゃあ、今日はここまでだな。帰りのＨＲは西村先生が出るのか、ちょっと確認をしてくるから、待機しているように」

蓮夜は１度、教室を出て行く。

第１１問

「それじゃあ、西村先生、お願いします」

「あぁ」

蓮夜は西村教諭にＦクラスのＨＲを任せると職員室に振り分けられた自分の机に荷物を降ろすと、

（……明久を痛めつけるためにあれだけ協力するんだからな。上手く道筋を立てれば良いクラスになると思うんだけどな）

Ｆクラスを見て感じた事を思い浮かべて苦笑いを浮かべた時、

「久島先生、Ｆクラスの生徒はどうでしたか？」

蓮夜の様子を見た福原教諭が蓮夜に声をかける。

「福原先生、それがなかなか……昔を思い出しますね」

「久島先生も元気でしたからね」

「いや、元気と言うか……俺は巻き込まれていたと言うのが真実と言うか……ケガで自棄になっていたのも否定できないと言うか」

「それなら、どうして、視線をそらすんですか？　本当は好きでやってましたよね？」

蓮夜は苦笑いを浮かべて学生時代を思い出すと言うと福原教諭は学

生時代の蓮夜を思い出したようで昔を懐かしむように笑うと蓮夜は友人達に巻き込まれただけだと言うが自分にも後ろめたい事があるようで福原教諭から視線を逸らした時、

「ん？　福原先生は久島先生の事を知っているのですか？」

「はい。久島先生が高校生の時に日本史の授業を受け持っていましたよ。彼も今は落ち着いていますが昔はかなり元気で。屋上からグラウンドまでワイヤーで降りてみたり、巨大な落とし穴を作って、いじめをしていた生徒を埋めてみたり、学園祭で無許可で花火を打ち上げてみたり、カツラと噂されていた校長の頭が本物か偽物か確認したりと他にもいろいろと」

「……久島先生」

「わ、若かったんです。もう、そんな事はしません！！」

西村教諭は簡単にＨＲを切り上げてきたようで話していた２人に声をかけると福原教諭は蓮夜が高校時代に行った騒ぎを話しだし、西村教諭は福原教諭から聞かされる蓮夜の高校時代の出来事に眉間にぴくぴくと青筋が浮かびだすと蓮夜は若さゆえの過ちだと全力で弁明を始め、

「……当然です。おかしな行動は控えてください。あのバカどもがマネをしそうですから、教師としての自覚を持ってお願いします」

「いや、流石に人に拷問にかけるような危ない事は……してたけど」

「……久島先生、あなたは何をしていたんですか？」

西村教諭は蓮夜に教師としての自覚を持つように言うと蓮夜はＦクラスの生徒が明久にしていた拷問に何かが引っかかったようで小さな声でつぶやき、その声は西村教諭の耳に届いたようで西村教諭は大きなため息を吐く。

「流石に冗談です。それより、西村先生、福原先生、授業の事なんですけど、俺は西村教諭の補佐と言う形になるらしいので、今のＦクラスの状況をできれば個人での成績を教えてください。個人毎の学習計画も立てて見たいので、福原先生にもご指導をお願いしたいんですが」

「わかってますよ。私が協力できる事は何でも言ってください」

「そうか。それなら、私の机に来てくれ」

「はい」

蓮夜は苦笑いを浮かべながら冗談だと笑い、彼なりのＦクラスの教育計画を立てたいようで西村教諭と福原教諭にＦクラスの成績を教えて欲しいと頭を下げると西村教諭は蓮夜が気に入ったようで、蓮夜に付いてくるように言うと、

「久島くんも立派な先生ですね」

福原教諭は教え子である蓮夜の成長が嬉しいようで西村教諭に授業のアドバイス受けている蓮夜の姿を見て優しい笑みを浮かべる。

第１２問

「……で、２人は何をしたかったわけだ？」

「「……」」

蓮夜が職員室でしばらく、西村教諭のアドバイスを受けていると明久と雄二がまた騒ぎを起こしたと言う話になり、蓮夜は西村教諭の補佐で２人の捕縛に動いき、雄二は蓮夜から視線を逸らすがすでに明久は蓮夜の前で土下座をしている。

「明久、顔をあげろ。お前達は目的があって『女子更衣室』に忍び込んだんだろ。話は聞く、それで納得がいかなかったら、根性を叩き直すだけだ。俺は玲と違っておかしな事はしない」

「……怒らない？」

「話を聞いてから考える。後は話をする時はきちんと相手の目を見る」

蓮夜は話をするために明久に頭をあげるように言うと明久は蓮夜から目を逸らすため、蓮夜は明久に状況をしっかりと話すように言うが、

「……久島先生、吉井と坂本を捕まえたのは確かにありがたいんだが、屋上から、ワイヤーで降りての奇襲はどうかと思うんだ」

「……俺もそう思う」

蓮夜が2人を捕まえるに至った過程には問題があったようで同席していた西村教諭と捕まった人間である雄二は眉間にしわを寄せる。

「いや、ちょっと、昔の血が騒ぎまして」

「……明久、お前の兄貴は何をしてたんだ？」

「い、いや、僕はあまりおかしな事をしてたとは聞いた事がなかったんだけど」

蓮夜は苦笑いを浮かべると雄二は明久に蓮夜の過去を聞くが明久も知らない蓮夜の一面だったようで首を横に振ると、

『西村先生、Fクラスの須川と横溝が！！』

「……今度はそっちか、久島先生、ここは任せても良いでしょうか？」

「はい。わかりました」

他にもFクラスの生徒が問題を起こしたようで西村教諭は明久が蓮夜に頭が上がらないのを理解したようで蓮夜に2人を任せて生徒指導室を出て行くが、

「……今更だけど、俺、今日は初日なんだけど、こんな事をして良いのか？」

「本当に今更だな」

蓮夜は西村教諭を見送った後に自分に明久や雄二を処罰できるのか

と首をかしげ、雄二はため息を吐く。

「まぁ、状況を確認してからだな。この学園はあまり停学とか直接的な処罰は嫌いみたいだしな」

「そうなの？」

「実際、最初の試召戦争の話も聞かせて貰うと実行犯はDクラスだとしても脅迫をしてるわけだからな。周りが納得がしているとは言っても、何もおとがめなしは本来はあり得ない。お前らはバカをやるのも良いけど、もう少し、西村先生や先生達に感謝をしなさい」

蓮夜は西村教諭からのアドバイスで文月学園の特性を理解しているようで苦笑いを浮かべると2人も昔の自分と同じように直ぐには理解できないがいつか西村教諭達の思いも理解出来ると思ったようだが、

「何で、鉄人なんかに」

「明久」

「う。わかったよ。感謝できるような事があったらね。と言う事で、雄二、帰ろうか？」

「そうだな」

明久はまだ蓮夜の言いたい事が理解できないようであり、とりあえず、話を切ると誤魔化して逃げようとする。

「それじゃあ、とりあえず、どう言う状況で女子更衣室に忍び込む

事になったか説明して貰おうか？　逃げようとしたのは罰を与えないといけないから、一先ず、正座で良いぞ」

しかし、蓮夜からは逃げきる事はできずに明久と雄二は床に正座をさせられる事になる。

第１３問

「……なるほど、明久らしいと言えばらしいんだが」

「な、何？」

「……常識で男子生徒が女子更衣室で待ち伏せをするな。そして、逃げ込むな」

蓮夜は明久と雄二から瑞希が転校してしまうかも知れなく、それを防ぐために雄二に協力を仰ごうとした途中で雄二の行動を読んで女子更衣室に入った事、雄二は幼なじみの少女『霧島翔子』から逃げていた途中で女子更衣室に隠れた事、２つの理由を聞いてため息を吐く。

「で、でも、そうでもしないと雄二を捕まえられないわけだし」

「……久島先生は翔子を何もわかっていないんだ。あいつに常識は通用しない」

蓮夜がため息を吐く様子に明久はバツが悪そうな表情をする隣で、雄二は眉間にしわを寄せて常識から外れないと翔子からは逃げきれないと言うが、

「坂本代表、１つ聞いても良いか？」

「お、おう」

「逃げるから、追いかけられたんじゃないのか？」

蓮夜はもう1度、ため息を吐くと雄二が逃げる事に原因があると言い切る。

「待て。普通に考えろ。逃げるだろ」

「なぜだ？　幼なじみが一緒に帰ろうと言ってきただけだろ。用事もないなら、一緒に帰るだけで良いわけだろ」

「そんな常識で翔子を測るな！！」

蓮夜は一緒に帰ってやるくらいしてやれば良いと雄二の行動に呆れたようだが雄二から見ると一緒に帰る事自体が危険な行為でしかないようで声を張り上げるが、

「坂本代表、良いか。常識外れな幼なじみが自分にしかいないと思ったら大間違いだ」

「……そうだね」

「おい。明久も久島先生もなんで俺から目を逸らすんだ」

蓮夜と明久は常識で測り知れない幼なじみを持っているのは雄二だけではないと言い、雄二は2人の反応に意味がわからないようで眉間にしわを寄せると、

「坂本代表が霧島さんから距離を取ろうとする理由もわかるが、坂本代表が割り切っていないのに拒絶をするのは間違っていると思うけどな」

「な、何を言ってるんだ！？」

「レン兄、雄二、どうかしたの？」

蓮夜は雄二が翔子への恋愛感情を押し込めようとしている事に気づいたようでくすりと笑うと雄二は見透かされた気分になったようで声を張り上げるが明久は意味がわからないようで首をかしげる。

「まぁ、明久は気にしなくて良い。玲の弟だけあって鈍さも常識外れだから、同年代の恋愛感は理解できないし、仮に理解できても理解に達するまでの知能がないから説明するだけ無駄だしな」

「ちょっと待って！？　明らかに罵倒が混じってるよね！？」

「明久、よくバカにされてるって気づいたな。それに気づけるようになっただけ賢くなったと言うことか」

「レン兄、頭を撫でないで！？」

蓮夜は明久には雄二の翔子への想いを理解できないから気にする必要はない事を伝えるが明久はその言葉に声を上げ、蓮夜は明久の反応に少し驚いたような表情をした後、彼の頭を撫で、

「……明久と久島先生の関係が良くわからないんだが」

雄二は目の前で繰り広げられるコントのような幼なじみのやり取りに頭がついて行かないようで眉間にしわを寄せる。

第１４問

「まぁ、とりあえずは２人とも真面目に清涼祭の準備に参加する事、姫路さんの体調を考えると設備向上は必須なんだ。売上を上げる事」

「だけど、設備の向上はまだしも姫路の転校の問題点は３つだろ」

蓮夜は明久と雄二に罰として清涼祭の準備に力を入れる事を言い渡すが雄二は何か考えているようで眉間にしわを寄せると、

「そうなの？」

「なるほど、元神童は伊達じゃないか」

雄二の様子に明久は首をかしげ、雄二が考えている事に蓮夜も気づいているようで苦笑いを浮かべる。

「レン兄、雄二、どう言う事？」

「設備向上は必須、だけど、それ以上に姫路さんの体調を考えると旧校舎の老朽化が酷いって事だ」

「後はクラスメートの成績、姫路の両親はレベルの低いクラスメート達ばかりじゃ成績の向上も考えられないだろ」

明久は残り２つの理由を教えて欲しいと言うと蓮夜と雄二は『設備』、『学習環境』、『クラスメート』だと話し、

「参ったね。問題だらけだ」

「3つ目は姫路と島田が召喚大会で活躍すればどうにかなるだろ。設備は売上しだい」

明久はどうしたら良いのかわからないようで胸の前で手を組み、首を傾げると雄二は2つはどうにかなりそうだが、

「学習環境か……普通に考えると学園がどうにかしないといけないレベルの問題だからな」

「そう言う事だ」

旧校舎の老朽化だけは生徒ではどうしようもできないため、蓮夜と雄二は頭をかく。

「レン兄、雄二、どうにかできないの？」

「とりあえずは学園長に話してみる必要があるな。それじゃあ、行くか？」

「行くって学園長室にか？」

蓮夜は学園長に話を聞いて貰う必要性があるため、2人を学園長に合わせようとするが雄二は簡単に学園長があってくれるとは思っていないためか首を傾げると、

「学生2人じゃ門前払いもあり得るだろ。それに俺は学園長室に顔を出すようにも言われてるからな。まぁ、俺は新任の臨職、たいした力になれないかもしれないけどな」

「それでも充分だよ」

「あぁ。それより、大丈夫なのか。久島先生」

「何がだ？」

蓮夜は自分ではたいした力添えはできないと思ってくれと苦笑いを浮かべる姿に雄二は何かあるのか蓮夜の名前を呼ぶ。

「俺達は学園に文句を付けようとしてるわけだぞ。臨時職員の久島先生は学園長に目を付けられないか？　下手したら初日でクビとかないとも言えないだろ？」

「ちょ、ちょっと、レン兄、大丈夫なの！？」

雄二は蓮夜に立場的に大丈夫なのかと聞くと明久は事の重大さに気づいたようで蓮夜に詰めより、

「まぁ、大丈夫だろ。いきなりクビは契約を交わしてるし……大丈夫だと思いたい」

「ちょっと、それ、明らかに大事だからね！？　どうするのさ。その年で無職とか！？」

「大丈夫だ。しばらくは食えるくらいの蓄えくらいはあるから」

「なら、どうして目を逸らすのさ！？」

蓮夜は心配ないと笑うが明久は蓮夜の事が心配なようであり、声を張り上げると、

「俺は臨時でも新任でも教師なんだ。なら、やる事は決まってるだろ。生徒の事を考えて動くのが教師、それだけだ。俺の事は良いから、行くぞ。教室でお前らを待ってる仲間もいるんだろ。お前らはその道筋を立てないといけないんだからな。ほら、2人とも行くぞ」

「明久、行くぞ。どうなるかわかんない事なら、ここで悩んで立って仕方ねえ」

蓮夜はそれが教師だと笑い、雄二は蓮夜の言葉にやりにくいと思っているのか頭をかきながら立ち上がると3人で学園長室に向かって歩き出す。

第１５問

「誰だい？」

「久島です」

「悪いね。少し待ってくれるかい」

３人は学園長室の前に着き、ドアをノックをすると学園長からは少し待つように指示があり、しばらく待っていると、

「……それでは失礼させていただきます」

学園長室では学園長と『竹原教頭』が話をしていたようで竹原教頭がドアを開けて学園長室からでてくる。

「……君が新任の久島先生か？　私は教頭の竹原です」

「はい。挨拶が遅れて申し訳ありません」

竹原教頭は蓮夜を見るなり、彼の性格なのか蓮夜を『臨時職員』と見下したような目で見るが蓮夜はその視線を気にする事なく頭を下げると、竹原教頭は後ろにいた明久と雄二には何かを言う事なく歩いて行ってしまう。

「レン兄……何か、竹原先生、感じ悪くない？」

「あぁ。俺達を完全に見下したような目をしてやがった」

「まぁ、プライドが高そうだしな。あんなもんだろ」
明久と雄二は竹原教頭の態度が気に入らないようだが蓮夜は臨時職員で渡り歩いてきているため、気にした様子もなく、
「久島先生、待たせて悪かったね。入ってきな」
「はい。失礼します。明久、坂本代表も行くぞ」
学園長から入室の許可が出たため、蓮夜は2人に声をかけて学園長室に入ると、
「久島先生、後ろの2人は何だい？」
「すいません。ウチのクラスの坂本代表と吉井明久なんですが、学園長先生に直談判したい事があるとの事でしたので」
「……学生風情が直談判ね」
蓮夜は学園長に頭を下げた後、明久と雄二が学園長に話したい事を伝え、学園長は少し考え込むような素振りをする。
「レン兄、大丈夫なの？」
「明久、ちょっと静かにしていろ」
明久は学園長の様子に蓮夜の腕を小突くが蓮夜は明久に静かにするように言い、
「まぁ、話くらいは聞いてやっても良いけど、初日から2年の問題

児を2人、学園長室まで連れてくるなんて、久島先生、あんたは覚悟ができているんだろうね？」

「覚悟？　する必要がありますか？　私は福原先生と高橋先生から学園長先生は教師も能力主義だと聞かされました。この程度でクビにされないとは思っていますが」

「……なるほど、食えない男さね」

学園長は蓮夜を脅すような視線を向けるが蓮夜はにっこりと笑い、学園長はそんな事はしないと言う様子に学園長は口元を緩ませ、

「じゃりども、少し待ってな。先に久島先生との少し話があるからね」

「「……わかりました」」

学園長は蓮夜との話を先に終わらせるため、明久と雄二に待っているように言い、2人は頷くと学園室中央にある来客用のソファーに学園長に許可を得る事なく座り、

「……くそじゃりども、あんたらに常識はないのかい？」

「……2人とも、せめて許可を得てから、座ってくれ」

蓮夜と学園長は2人の行動に大きく肩を落とすが、

「え？　だって、立って待ってるのは疲れるよ」

「これくらいは良いだろ。別に減るものでもないんだし」

明久も雄二も自分達の行動が常識だと思っているのか気にする様子はなく、

「……久島先生、悪いね。先にこのくそじゃりどもの話を終わらせるよ」

「……すいません。学園長先生」

学園長は2人の態度に先に終わらせてしまおうと思ったようである。

第１６問

「却下だね」

雄二が学園長に旧校舎の改修工事を頼むと学園長は少し考えるような素振りをした後に２人の直談判を跳ね返す。

「雄二、このばばあをコンクリに詰めて捨ててこよう」

「……明久、もう少し態度には気を使え。まったく、このバカが失礼しました。どうか、理由をお聞かせ願えますか？　ばばあ」

「まったくですね。ばばあ！？　レ、レン兄！？　何をするんだよ」

明久と雄二は納得がいかないようで学園長に理由を話すように詰め寄るがその態度は目上の人間に物を尋ねる態度ではなく、蓮夜は２人の頭をメモ帳で叩くと学園長室には小気味の良い音が２度、響き、

「……中身が入ってないから、良い音がするな」

「まったくさね」

蓮夜は頭を押さえる明久と雄二を気にする事なく、２人の頭には中身が詰まっていないと言い切ると学園長は蓮夜の言葉に苦笑いを浮かべる。

「何すんだよ？」

「坂本代表、明久、納得がいかないのかもしれないけどな。それは

目上の人に物を尋ねる態度ではない」
雄二は蓮夜を睨みつけるが蓮夜はため息混じりの言葉で2人の態度は良くないともう1度、言い聞かせると、
「学園長先生、理由をお聞かせ願いますか？　2人も納得していないようですし、それにFクラスには1人身体の弱い生徒がいまして彼女の体調を考えてしまうと」
「身体が弱い生徒？　……あぁ。姫路瑞希だったかい？」
「そうです。お願いです。このままの設備だと姫路さんが転校するかもしれ！？　レン兄、ポンポン、頭を叩かないでよ！？」
蓮夜は2人が設備向上を願い出た理由を補足すると学園長は瑞希に心当たりがあるようで考えるような素振りをし、その様子に明久はまくしたてるように話しだそうとするが蓮夜は明久の頭をもう1度、メモ帳で叩く。
「本当に良い音がするな」
「だろ」
「ちょっと、レン兄、雄二、それはなんなのさ！！」
明久の頭を叩いた時に響いた音に雄二は明久をからかう事に全力を尽くすように切り替えたのか真剣な表情をすると蓮夜は苦笑いを浮かべて答え、明久は2人の反応が不満だと声をあげるが、
「学園長先生も知っての通り、彼女は現在の総合得点は学年で2番

と優秀な生徒ですが身体が弱く、彼女の両親は彼女を心配して転校も視野に入れているそうです」

「やれやれ、久島先生、あんた、本当に食えない男だねえ。生徒の前で良く次から次と学園長であるあたしを『脅して』くるね」

「学園長先生、何を言っているんですか？　その生徒が転校を望んでいないんです。教師として生徒の力になるのは当たり前ですよ」

蓮夜は学園長に瑞希の優秀さを話し始めると学園長は彼女を引き留めるメリットをはじき出したようで蓮夜の言葉に少しだけ表情を緩ませ、蓮夜をからかおうとするが蓮夜はにっこりと笑い、教師として当然の事をしていると返し、

「……雄二、レン兄とばばあは何を話してるの？」

「……久島先生、侮れねえじゃねえかよ」

明久は蓮夜が押し気味に話しをしている様子を理解していないようで首を傾げる隣りで雄二はいつの間にか学園長を巻き込んでいる蓮夜の様子に面白いと思ったのか小さく口元を緩ませる。

第17問

「まぁ、確かに優秀な生徒が他の学校に流出のは避けたいね。だからと言って簡単に頷くわけにもいかないね。設備に差を付けるのは文月(ウチ)学園の方針であり、これはスポンサーにも了承を得ている事さ。それを覆すんだ。それに見合った結果がないとできないね」

「見合った結果ですか？」

学園長は何か考えがあるようで条件をつけたいようであり、蓮夜は首を傾げると、

「そこのくそじゃり、2人、話を聞きな。改修の話は前向きに検討してやるよ。その代わりと言ってはなんだけどね。あたしのお願いを2人に聞いて貰おうかね」

「わかった。明久を好きにして良いぞ」

「……誰もそんな頭の悪そうな不細工なくそじゃりを貰ったって嬉しくないさね」

学園長は交換条件を明久と雄二に話そうとすると雄二はおかしな事を考えたようで明久を売り渡そうとするが学園長は明久を直ぐに却下し、

「こっちだって、お前みたいなばばあ、お断りだ！！」

「……明久、坂本代表、頼むから話を聞くって事を覚えてくれ。話がまったく進まないから」

明久は学園長に向かい叫び、蓮夜は大きくため息を吐く。

「それで、ばばあ。明久の身体が目的じゃないなら、何が目的だ？　悪いが、俺はばばあみたいなのはお断りだぞ」

「あたしだって、あんたみたいなくそじゃりはお断りだよ。それにあたしには旦那がいるしね」

「「ばばあ、嘘を吐くな！！」」

雄二は明久がダメなら自分の身体が目的かと言い始め、学園長を拒絶するが学園長は話が進まない事に大きく眉間にしわを寄せて２人が目的ではないと言い切るがその言葉を明久と雄二は信じられないようで大声で叫び、

「……本当に失礼なくそじゃりどもだね。あんた達は本当に設備を上昇させる気はあるのかい？」

「学園長先生、本当に申し訳ありません」

学園長は呆れているようであり、蓮夜は学生２人の態度に申し訳なさそうに学園長に頭を下げ、

「それで、あんた達は話を聞く気はあるのかい？　ないなら、この話はなかった事にするよ」

「聞く、聞きます」

「もったいぶってないでさっさと！？　ぽんぽん、ぽんぽんと頭を

叩くんじゃねえよ！！」

「だから、目上の人に対する言葉づかいには気をつけろ」

学園長は明久と雄二に話を聞くつもりはあるのかと確認すると明久は直ぐに返事をするが雄二は態度が大きく、蓮夜にメモ帳で頭を叩かれる。

「まったく、久島先生も初日からこんなくそじゃりどもの相手をするのは大変だね」

「まぁ、でも、学生は元気なのが1番ですから、勉強ばかりで下を向いているよりは良いと思いますけど」

学園長は蓮夜の様子に苦笑いを浮かべると蓮夜は苦笑いを浮かべて返事をし、

「学園長先生、すいませんが条件をお願いします。明久、坂本代表も話を聞く」

「う、うん」

「あぁ」

蓮夜はもう1度、学園長に頭を下げると明久と雄二に遊んでないで話を聞くように言い、

「それじゃあ、始めようかね。あんた達は清涼祭で行われる召喚大会を知っているかい？」

学園長は1度、頷くと明久と雄二に清涼祭で行われる召喚大会の事を聞く。

第１８問

「あぁ。ウチのクラスにも参加者はいるからな」

「そうかい。それなら、話が早いね。その優勝者に与えられる賞品の１つに如月ハイランドのプレミアムオープンのペアチケットにちょっとおかしな噂があるんだけど、あんた達にそのチケットを回収して貰いたいのさ」

雄二は瑞希と美波が参加するため、召喚大会の事くらいは知っていると頷くと学園長は明久と雄二に召喚大会で優勝するように提案するが、

「ペアチケットだと？」

「坂本代表、どうかしたのか？」

雄二は学園長の提案に何かあるのか顔が血の気が引いて行き真っ青になりだし、蓮夜は雄二の顔を覗き込む。

「ば……学園長、ペアチケットの回収って言うけど」

「あぁ。最初に言っておくよ。優勝者に譲ってもらうとかは却下だよ。あんた達２人で優勝するんだ。もちろん、強奪も却下だよ」

「……ちっ」

明久は気にする事なく学園長にチケットの回収が目的なら召喚大会に優勝する必要はないと言おうとするが学園長は直ぐに否定し、明

久は舌打ちをするが、

「学園長先生、先ほど、おかしな噂があるとも言っていましたが、おかしな噂と言うのは」

「あぁ。そうだね。プレオープンのチケットには如月グループがウェディング体験と言うものを考えているらしくてね」

「ウェディング体験だと？」

蓮夜は雄二の様子も気になるがそれ以上にペアチケットにある噂を聞くと学園長は『ウェディング体験』と言うイベントがあると話し始めるがその言葉に雄二の顔はさらに血の気が引いて行き、

「体験ですよね。それがおかしな噂につながるとは思えないんですけど」

「普通はね。だけど、ウチは試験校と言う名目で世界中から注目を受けている学校だよ。そして、如月ハイランドは遊園地の他に」

「……結婚式にも力を入れたいってわけですか？　だとしても無理やり過ぎますね」

蓮夜はあまりおかしな噂は無さそうだと首を傾げるが学園長は補足をして行き、その途中で蓮夜は如月グループの思惑が理解出来たようで大きく肩を落とすと、

「レン兄、何があるの？」

「そのチケットを使って入場すると如月グループが結婚、幸せな家

庭生活をプロデュースしてくれるみたいだ」
明久は話が理解できないようで蓮夜に聞き、蓮夜は企業が考える手段ではないと言いたげに大きなため息を吐き、
「そんなものを賞品にしないでください」
「悪いね。もう無理なのさ。竹原が決めた事とは言え、如月グループは大口スポンサーだから、へそを曲げられても困るしね。結局は生徒達の問題だから目をつぶろうかとも思ったんだけど、この間、ラブレター1つでバカ騒ぎをした奴らもいるだろ。優勝した人間を襲って無理やり、チケットを奪って如月ハイランドに拉致、ウェディング体験、結婚じゃ、生徒がかわいそうだしね」
蓮夜はそんな噂のある怪しいものなら賞品から外す事も視野に入れて欲しいと言うが学園長は首を横に振り、
「それにあんた達Fクラスが召喚大会で優勝できればスポンサー達にも設備の改修工事は話も進めやすいしね」
「だけど、正直、僕と雄二じゃ」
「やってやる。ばばあ、その代わり、今のままじゃ、優勝なんて無理だ。俺にいくつか条件を出させろ」
学園長は明久と雄二が優勝すれば旧校舎の改修工事はスポンサーからの承諾も考えやすいと話すが明久は優勝できるはずはないと思い苦笑いを浮かべた時、雄二は鬼気迫る表情で学園長の提案を受けると叫ぶ。

第１９問

「条件？　何だい？　点数操作だとかは却下だからね」

「……ちっ」

「坂本代表、舌打ちは止めなさい」

学園長は雄二の様子に点数操作は問題外だとため息を吐き、雄二は少しは期待していたのか舌打ちをする姿に蓮夜は大きく肩を落とし、

「冗談だ。まぁ、多少は期待したけどな」

「それで条件ってのは何だい？　無茶なものは聞けないよ」

雄二はまた蓮夜に頭を叩かれると思ったのか、１歩引いて苦笑いを浮かべると学園長は改めて雄二に向き合う。

「条件は２つ。出場者のトーナメント表をいじらせろ。後は対戦科目を俺に決めさせる事」

「……それくらいなら聞いてやっても良いね。わかったよ。それじゃあ、話はこれで終わりだよ。あたしは忙しいんだ。さっさと消えな。くそじゃりども」

雄二が出した条件を聞いた学園長は条件を飲むと直ぐに明久と雄二を追い出そうとし、

「……学園長先生、教師は生徒の手本にならなければいけないんで

すから、もう少し言葉づかいを気を付けて頂きたいのですが」

「悪いね。あたしは学園長って言っても教師じゃなくて研究者さね。そう言うのは西村先生達に任せるさ」

蓮夜は学園長の言葉づかいは生徒の教育に良くないとため息を吐くと学園長は蓮夜の助言など聞く気はないようで苦笑いを浮かべ、

「ばばあにそんな事は期待しねぇよ」

「まったくだね」

「明久、坂本代表！！」

「逃げるぞ。明久」

「了解」

明久と雄二は学園長にはそんなものは期待しないと言い、蓮夜は2人の態度に声を上げると2人は蓮夜から逃げるように学園長室を出て行き、

「まったく、あの2人は……学園長先生、申し訳ありませんでした」

「まぁ、良いさね。それで久島先生、一応は就業規則とかを説明しないといけないんだけどね。面倒だから、勝手に読んでくれるかい。あたしは清涼祭も近いから忙しいんだよ」

「はい。わかりました」

蓮夜は2人の態度の悪さに頭を下げると学園長は気にしている様子もなく、蓮夜に就業規則をまとめた冊子を渡し、蓮夜はそれを受け取る。

「それを読んで聞きたい事があったら、他の先生にでも聞きな。何かあるかい？」

「何かですか？　それなら、竹原教頭は何を企んでいるんですか？　そして、学園長先生は明久と坂本代表に『白金の腕輪』を獲らせてどうするつもりですか？」

「……」

学園長は蓮夜も追い出したいようで簡単に終わらせようとするが蓮夜はにっこりと笑うと学園長と竹原教頭の様子に何かを感じ取っているようであり、学園長に向かって学園長の目的は明久と雄二にもう1つ優勝賞品である白金の腕輪を獲らせる事だと聞くと蓮夜の言葉は学園長の目的の核心を突いていたようで学園長は大きく肩を落とし、

「……いつから気づいてたんだい？」

「いえ、気づいていると言うまでには至っていなかったのでカマをかけさせていただいただけです」

「……本当に食えない男だね」

蓮夜にいつから気づいて居たのかと確認するが蓮夜は学園長の様子から推測しただけで本当は何も気づいていないと言い切り、学園長は眉間にしわを寄せる。

第２０問

「……白金の腕輪の暴走ですか。それを竹原教頭は利用して文月学園を乗っ取りたいと」

「そう言う事さね」

蓮夜は学園長から召喚大会の優勝賞品である『白金の腕輪』には重大な欠陥がある事と竹原教頭はそれを世間に暴いて文月学園を乗っ取る事を考えているは聞き、眉間にしわを寄せると、

「……学園長の様子から今更、白金の腕輪を賞品から取り下げる事はできないんですね？」

「あぁ。すでにスポンサーには新技術として発表してるしね。それを取り下げると文月（ウチ）学園は信頼をなくす。白金の腕輪のお披露目で暴走しても同じ、八方ふさがりさ」

蓮夜は白金の腕輪を賞品から外す事は考えられないかと聞くが学園長は首を横に振る。

「まぁ、そうですね。確かに明久と坂本代表なら暴走する心配はなさそうだ」

「……久島先生は反対しないのかい？」

「現状で言えば反対はできませんよ。まだ、暴走するとは限りませんしね」

蓮夜は勝ち目があると思っているようでくすりと笑うと学園長は蓮夜の反応に驚いたような表情をするが、

「最悪の場合は優勝した人間が成績上位者なら、回収するしかありませんし、その場合は仕方ないでしょ」

「確かにね。最悪の場合はそうしようかい。久島先生、あのくそじゃり2人の事は頼むよ。くれぐれもあまり成績を上げすぎないようにね」

「いや、坂本代表はまだしも、明久がCクラス程度に上げるのは1週間やそこらじゃ無理ですよ。あいつは生粋のバカですから」

「……あたしが言うのもなんだけど、もう少し言葉を選べないのかい？」

学園長は蓮夜の様子を見て、少しでも明久と雄二の成績を上げて貰おうと思ったようであり、蓮夜は学園長の言葉の意図を読み切り、学園長は蓮夜の口から出てくる言葉にため息を吐く。

「まぁ、口が悪くても態度が大きくても、俺も学園長先生も『教師』ですから、少なくとも竹原教頭は教師じゃないですからね」

「教師ね。あたしはさっきも言ったけど科学者だよ」

蓮夜は竹原教頭が文月学園を牛耳るのはあまり喜ばしく思っていないようであり、学園長は蓮夜の言葉に少しだけ照れくさくなったのか蓮夜から視線を逸らし、

「わかりました。そうしておきます。ただ、高橋先生や福原先生、

西村先生、他にも今日みた限りでもここの先生方は生徒のために努力してます。それを作ったのは学園長先生ですから、だから、俺は臨時でもここの職員として学園長先生を信じます」

「やれやれ、よく、そんな恥ずかしい言葉が出てくるね」

蓮夜は自分は教師ではないと言う学園長の様子にくすりと笑うと学園長は大きく肩を落とすと、

「それじゃあ。あたしもやれる事をしようかね。久島先生、あたしの用件はもう終わりだよ。さっさと出て行ってくれるかい？」

「わかりました。失礼します。学園長先生も無理しないでください」

「わかってるよ。身体を壊さない程度に頑張るよ」

学園長は白金の腕輪の修理で忙しいようで蓮夜を追い払おうとし、蓮夜は学園長の考えが理解出来るようで頭を下げると学園長室を出て行く。

第２１問

（さてと、一先ずは就職ができたわけだし、１人でも祝杯をあげますか？）

蓮夜は勤務時間を終えると面接を受けに行ったその日に就職が決まるとは思っていなかったため、苦笑いを浮かべながら食品とビールを買い込んでいると、

「ん？　久島先生、夕飯の買い出しっすか？」

「……久島先生？」

雄二が長い黒髪の綺麗な少女と歩いており、蓮夜を見つけて声をかける。

「坂本代表、そうだよ。就職も決まったわけだし、祝杯をね」

「１人でかよ。ずいぶんと寂しいな」

「まぁ、いきなりだったし、週末ならまだしもな……この年になると独り者の友人も少なくなってな」

雄二は蓮夜の買い物かごのビールを見て、蓮夜をからかうように言うが蓮夜は少しだけ恥ずかしそうに頭をかくと、

「それより、彼女か？　坂本代表も隅におけないな」

「ち、ちげえよ！？　か、勘違いするなよ。こ、こいつは……」

「……雄二の妻の『霧島翔子』です」

「妻？　まだ、結婚はできない年だから、婚約者か？　霧島さん、俺は今日からFクラスの担当教師に赴任した久島蓮夜です。よろしく」

蓮夜は話を変えようしたようで雄二の隣に少女の事を聞くと少女は『霧島翔子』と名乗り、蓮夜は翔子に頭を下げるが、

「ちょ、ちょっと待ってくれ！？　こ、こいつは婚約者でも何でもない。ただの『幼なじみ』だ！！」

「幼なじみから結婚か？　じっくりと愛をはぐくんでいるんだね。俺は応援するよ」

「……久島先生、ありがとう」

雄二は翔子を幼なじみだと叫ぶが蓮夜は雄二の中にある感情（しょうこへのおもい）も感じ取ったようで2人の様子ににっこりとほほ笑み、2人を祝福し、翔子は頬を染めて蓮夜に頭を下げる。

「しかし、羨ましいな。こんなにお互いを想いあえる幼なじみがいると言うのは」

「……いや、だから、久島先生、俺の話を聞いて……なぁ、久島先生、先生は明久と幼なじみなんだよな？」

「正確に言えば、明久の姉の玲とだな」

蓮夜は翔子の様子に苦笑いを浮かべると雄二は翔子との関係を否定しようとするが、その途中で蓮夜にも幼なじみの女性がいた事を思い出す。

「実は何かあったとかないのか？」

「玲とか……まぁ、その話は置いておこう」

「何だよ。この状況で……」

雄二は反撃だと言いたげに蓮夜と玲の話を聞こうとすると蓮夜は雄二の肩に手を置き、

「……坂本代表、覚えておくんだ。間違っても酒に飲まれるな」

「お、おう。って、何があったんだ！？　久島先生！？　お、俺は聞いちゃいけない事を聞いたのか！？　って、言うか、そんな事を生徒の前で言うな！？　こ、この事を明久は知ってるのか！？」

「……生徒以前に俺は君達の人生の先輩だ。同じ事になりそうな人間にはしっかりとアドバイスはしないといけない。明久には……まぁ、知らない方が幸せな事もあるだろ」

「俺だって、そんなリアルな話は聞きたくないわ！？」

蓮夜は意味ありげな言葉を雄二に送ると雄二は蓮夜の身に過去に何があったかを理解したようで慌て、蓮夜はこの先に雄二にはそのような事が必ず起きると死の宣告をする。

「……久島先生、吉井のお姉さんにアドバイスを貰いたいから、連

絡先を教えて欲しい」

「しょ、翔子！？　お前は何を言い出すんだ！？」

「……吉井のお姉さんとは話が合いそう。きっと、雄二との事で的確なアドバイスが貰える」

「く、久島先生、おかしな事を聞いて悪かった。俺と翔子は帰る」

「おう。気を付けて帰るんだぞ」

翔子は蓮夜と雄二の様子に玲に興味を持ったようであり、雄二は身の危険を感じたようで翔子を引っ張って蓮夜から逃げるように去って行く。

第２２問

「どうした？」

「レンくん、面接はどうでしたか？」

蓮夜が夕飯の準備をしていると携帯電話が鳴り、蓮夜はディスプレイに映る『吉井玲』の名前に電話を取ると電話の先からは蓮夜の幼なじみであり、明久の姉である玲が直ぐに蓮夜に声をかけると面接の手ごたえを聞き、

「……なぜか、即日採用で仕事をしてきた」

「採用されたんですか？　良かったですね」

「まぁ、そうだな」

蓮夜は夕飯の準備より、玲との会話を優先しようとガスコンロの火を止めると居間のソファーに座る。

「それでは久島先生に質問です。新しい勤務先はどうでしたか？」

「ん？　そうだな。昔を思い出した」

「それは毎回、学校を変える度に言っていませんか？　だいたい、私の質問の答えにはなっていません」

「まぁ、そうなんだけどな」

玲に返事をすると玲は蓮夜の返事に不満げな声をあげ、蓮夜は電話の先の玲の様子を思い浮かべると、

「そうだ。担当したクラスに明久がいたぞ」

「アキくんがですか？　どうですか？　いつも通り、不細工で甲斐性はなかったですか？」

「……その言い方は止めろよ」

明久の事を話すが玲の明久の評価は低いようであり、蓮夜は玲の反応に苦笑いを浮かべる。

「それで時差があるからいつもはメールなのに電話をかけてくるなんて何かあったか？」

「レンくんの声が聞きたくなっただけです」

「あぁ。そうか」

「照れてますか？」

「まぁ、否定はしないよ」

蓮夜は玲から電話に彼女に何かあったのかと聞くと玲はただ蓮夜の声が聞きたくなっただけだと言い、蓮夜は彼女の言葉に照れたようで首筋をかく。

「そうですか。満足です」

「そりゃ、良かった」
電話の先から聞こえる嬉しそうな玲の声で蓮夜は敵わないと思っているようであり、
「忘れてました。レンくんに報告しておかないといけない事がありました」
「報告？　何だ？」
玲は蓮夜に話しておきたい事があると言い、蓮夜は首を傾げると、
「3カ月だそうです。レンくんがこっちまで私に会いにきてくれた日の子です」
「ちょっと待て！？」
「冗談です。あの時は穴を開け忘れました」
玲は電話の先で子供ができたと言いたいのか意味深に笑うと蓮夜は声をあげるが蓮夜の慌てように玲の声は少しだけ残念そうである。
「あ、あのな。今の状況でおかしな事を言うな。俺は教師だと言っても臨時教師であって収入だって安定してないんだぞ。文月にだっていつまでいられるかわからないんだからな。それに挨拶の前に子供ができたら、俺はおじさんとおばさんになんて言えば良いんだ？」
「大丈夫です。お父さんとお母さん、お義父さん、お義母さんにはすでに了承済みです。知らないのはアキくんだけです」

「……悪い。どこまでがホントでどこからが冗談かまったくわからない。それにどうして明久には秘密なんだ？」

蓮夜は玲の様子にため息を吐くが電話の先の玲はすでに根回しは終わっていると言い、蓮夜は眉間にしわを寄せるが、

「決まってます。大好きなお姉ちゃんが大好きなレンくんに手込めにされてると知った時のアキくんの顔を見るのが楽しみだからです」

「……いや、明久は俺と玲の関係を知ったら本気で俺は考え直すように言われる気がするんだ」

「アキくんに反対されたら考え直してしまいますか？」

「そんなわけがないだろ」

「はい。レンくんなら、そう言ってくれると信じてました」

玲は蓮夜を試すような事を言うが蓮夜の答えは決まっており、玲は蓮夜の答えに嬉しそうに返事をする。

「……試すような事は言わないでくれ」

「せっかく、同じ大学まで一緒に留学したのに先生になりたいと言って、こっちで決まりかけてた就職も蹴って日本に帰ってしまったレンくんが悪いんです」

「それに関しては反省してるって、悪かったよ。さびしい思いをさせてる」

玲は蓮夜と離れているのがさびしいようで口を尖らせると蓮夜は苦笑いを浮かべて玲に謝ると、

「そうです。私がどれだけ寂しいかレンくんはわかっていません」

「いや、まぁ、何だ……悪い」

蓮夜は玲のご機嫌を取りたいようだが言葉が見つからないようであり、

「レンくん、謝られると少し悲しくなります」

「あぁ。そうだな」

玲の言葉に蓮夜は気分を切り替えようと思ったようで1度、深呼吸をすると離れている距離を埋めるようにお互いの今の状況を話して行く。

第２３問

（……変な話を振らなければ良かった。いや、待て。昨日の話を考えると相手の事は言っていなかったんだ。久島先生がその酒に飲まれた時の相手が明久の姉貴とは限らないだろ）

雄二は昨日、商店街で聞いてしまった蓮夜の話におかしな事が頭をよぎっているようで眉間にしわを寄せていると、

「おはよう……あれ？　雄二、どうかしたの？」

「あ、明久！？　べ、別に何もねぇよ！！」

登校してきた明久は何かを真剣に考えている雄二を見て違和感を覚えたようで声をかけるが雄二は蓮夜の相手が玲だと思い込んでいるため、声を裏返す。

「そうなの？　また、何かして霧島さんに素敵な腕輪をつけられたんじゃないの？」

「……あんな事、２度とあってたまるか」

明久は雄二の様子に翔子と何かと決め付けたようで机代わりのミカン箱の上にカバンを置くと雄二は翔子に拘束具を付けられ映画館に拉致された時の事を思い出したようで顔を引きつらせると、

「な、なぁ。明久、幼なじみが良くくっつくって話は聞くけどよ」

「何？　自分と霧島さんの事を言ってるの？　そうだね。雄二みた

いな不細工が霧島さんみたいな美人の隣にいるのは許せないよ」

「あ？　てめぇ、何だと、バカ久」

「あ？　やるのか？　バカ雄二」

雄二は明久が蓮夜と玲の関係の事を知っているのか気になるようだが、明久の言葉が頭にきたようで睨みあいを始めようとするが、

「待つのじゃ、2人とも、雄二、お主は明久に聞きたい事があったのではないのか？」

「そうです。落ち着いてください」

2人のやり取りを見ていた秀吉と瑞希が2人を止める。

「そうだな」

「……命拾いしたな。雄二」

「あ？　それはお前だろ」

2人は秀吉と瑞希の言葉に一瞬、ケンカを中断しようとするが簡単に収まるわけはなく、取っ組み合いになりそうになった時、

「明久、坂本代表、朝からケンカはしない。席に座れ。ＨＲを始めるぞ」

ＨＲの時間になったようで蓮夜が教室に入ってきて2人を止めるが、

「レン兄、止めないでくれ。僕はこの不細工をグロテスクに殺さないと気がすまな！？」

「……明久」

「……雄二、命拾いしたな。レン兄に免じて今日のところは引いてやる」

明久は止まる事はなく、雄二につかみかかろうとすると蓮夜の声は少し低くなり、蓮夜の様子に明久は身の危険を感じ取ったようで捨て台詞を吐いて自分の席に座ると雄二も蓮夜の顔を立てようと思ったのか明久に続くように席に座り、

「久島先生、ＨＲは久島先生が担当するんですか？」

「違うよ。基本的には西村先生が行うんだけど、今日は3年生のＦクラスの生徒が騒ぎを起こしまして生徒指導室に詰めているので変わりだ」

瑞希は昨日の帰りのＨＲが西村教諭だったのに蓮夜がきた事に首を傾げると蓮夜は苦笑いを浮かべて今朝の状況を話し、

「それではＨＲを始めましょう……島田さん、どうかしたかい？」

「あの。久島先生、昨日だけで女子生徒５人から告白されたってホントですか？」

蓮夜はＨＲを開始しようとすると美波は蓮夜に暴動になりそうな事だが気になるようで蓮夜が女子生徒から告白されたと言う噂の事実を確かめようとする。

「……正確には7人と船越先生からです。当然、断りました」

『『『『殺せ！！！！！』』』』

蓮夜は女子生徒からの告白に困っているようで大きく肩を落とすがそんな蓮夜の様子がもてないＦクラス男子の怒りに火を点け、教室から叫び声が上がり始め、

「レン兄、逃げて！！！」

「ちょ、お前ら、落ち着け！！　島田、こんなところでそんな騒ぎになりそうな事を聞くな！！」

「そ、そうね。うかつだったわ。久島先生、逃げて！？」

明久、雄二、美波の３人はクラスメートの暴走に顔を引きつらせながら蓮夜に逃げるように叫ぶが、

「落ち着きなさい。ＨＲを始めますよ」

蓮夜は身の危険など感じてないようでＦクラスの生徒の様子に大きくため息を吐いており、逃げる様子はない。

第２４問

「あ、明久、不味いのじゃ、このままでは久島先生が」

「わ、わかってるよ。レ、レン兄、お願いだから逃げて！！　このままじゃ、レン兄が！？」

明久と秀吉はＦクラスの生徒が嫉妬で人を殺せると思っていないであろう蓮夜に全力で逃げろと叫んだ時、

「へ？」

「まったく、ＨＲを始めると言っているのが聞こえないのか？」

蓮夜はチョークを１本持つと先頭を切って席から立ち上がり、蓮夜に殺意を向けていた『須川亮』に向けてチョークを投げると蓮夜の手から放れたチョークは亮の額の中心を見事に撃ち抜き、亮の額でチョークは粉々に砕けるばかりか亮はチョークの勢いに負けて後方に吹き飛び、畳に後頭部をぶつけて白目を向き、教室はあり得ない状況に一瞬の静寂が訪れ、蓮夜のため息混じりの声だけが響く。

「お、俺は下手したら、昨日、あれを喰らっていたのか？」

「チョーク投げの威力じゃないのじゃ」

「他にも喰らいたい奴はいるか？　いるなら、１発ずつお見舞いするぞ」

雄二は目の前で起きた白目を向いている亮に顔を引きつらせるが蓮

夜は気にする様子はなく、蓮夜は立ち上がっている生徒達を見てくすりと笑うと生徒達は次々と席に座って行き、

「あ、あの。久島先生、どうして、チョーク投げなんですか？」

「ん？　昨日も言ったけど教師はチョークを投げるものだからだ」

「えーと、少し古いと思います」

瑞希は蓮夜がチョークを投げる理由を聞くと蓮夜は質問の意味がわからないようで首を傾げ、瑞希は蓮夜の様子に苦笑いを浮かべ、

「そうか？　俺の高校の時は騒ぐと福原先生に良く喰らったんだけどな。まぁ、もう、7年も前だから古く感じても仕方ないか。まだ、福原先生の威力には届かないって言うのに、やっぱり、投げる時に手首のスナップを加えて貫通力をあげて威力を増さないといけないな。これじゃいつまでたってもロッカーに穴を開けられない」

「か、貫通力？　レン兄、ちょ、ちょっと待ってよ！？　チョーク投げに貫通力はいらないから、貫通したら困るからね！？」

蓮夜は瑞希の言葉に高校生時代に福原教諭から喰らったチョーク投げを思い出しているようで苦笑いを浮かべるが蓮夜の口から出るチョーク投げにはあり得ない破壊力に明久は声をあげ、教室の空気は完全に蓮夜を西村教諭と同等の獣扱いの空気になっているが、

「待て。明久、問題はそこじゃない！！　久島先生、今、何先生って言いましたか？」

「何先生って、福原先生だよ。最初はお前達の担任だっただろ」

雄二だけは蓮夜の口から出た人物の名前が信じられないようで聞き間違いだと思いたいのか蓮夜に確認するが蓮夜の口から出る名前は文月学園の生徒が知っている福原教諭で間違いなく、

「ちょ、ちょっと待って。レン兄、僕達の知っている福原先生とレン兄の言っている福原先生って同一人物？」

「明久、何を言ってるんだ？　なんでお前らに知らない先生の話をしないといけないんだ？」

明久は重ならない福原教諭の姿に慌てて声をかけるが蓮夜は眉間にしわを寄せると、

「良いか。お前らが残りの約2年の学生生活を無事に過ごすとして怒らせてはいけないのは西村先生や保健体育の大島先生じゃない。福原先生だけは怒らせるな。これは俺の経験談だ。わかったら返事」

『『『『……』』』』

蓮夜は真剣な表情で福原教諭だけは怒らせるなと言うと蓮夜の様子に先ほどまで蓮夜に殺意を向けていた生徒達は息を飲んで大きく頷く。

第２５問

「それじゃあ、今日からは本格的な清涼祭の準備期間になるからな。ただでさえ、このクラスは準備が遅れてるんだ。間違っても野球とかをするなよ」

ＨＲを終えると生徒達は本格的に清涼祭の準備に動き始めるが、

（……基本的にこう言う事に向いていないんだな）

Ｆクラスの生徒達は計画性が皆無のようであり、自分勝手に動くだけで作業は一行に進むようには見えず、

「落ち着け。坂本代表、一先ずは掃除から始めよう。明久、お前、掃除は得意だよな？」

「う、うん。家事は昔からしてるから、得意だけどそれがどうかしたの？」

「掃除の指揮はお前が執れ。この設備じゃ、掃除に手を抜くなよ。坂本代表は島田さんと総指揮。後は調理の方は土屋と須川はしばらくは隅に寝かせておけ」

蓮夜はバラバラに生徒達が動いているのは効率的にも問題があるため、リーダーを決めるが先ほど蓮夜にチョークを喰らった亮はまだ目を覚ましておらず、蓮夜の言葉に生徒達は亮が作業の邪魔になると判断したようで廊下に放り投げる。

「それじゃあ、始めるぞ。何かあれば言ってくれ。なるべく、対応

するから」

「レン兄、それなら、洗剤が欲しい。流石に洗剤なしじゃ、この教室はキレイにならない」

「あぁ。それなら、ちょっと、職員室に行って借りてくる……おい。お前達はどうして俺から視線を逸らす？」

蓮夜は何か協力できる事はないかと聞くと明久は洗剤は必須だと手を上げ、蓮夜は洗剤を学園の備品だと思っているため、職員室に向かおうとするが文月学園は甘くなく、

「えーと、久島先生、言い辛いんですけど、Ｆクラスには貸して貰えないと思うわ」

「Ｆクラスは基本的に必要なものは自分達で用意する事が前提じゃからのう」

秀吉と美波はＦクラスには洗剤などは貸出されないかも知れないと答え、

「そう言う事か？　そう言えば、昨日、学園長先生に貰った就業規則にもそんなような事が書いてあったな。それなら、購買か」

「久島先生、購買ってどう言う事ですか？」

「ん？　必要なんだろ。明久、洗剤に何か注文はあるか？」

蓮夜は状況を理解したようで苦笑いを浮かべると購買に行くようであり、明久に何か指定はあるかと聞く。

「ないけど、レン兄、良いの？」

「ないと進まないんだろ。それくらいは出す。その代わり、遊ばずに真面目にやるんだぞ」

「う、うん」

明久は蓮夜が自腹で洗剤を買ってきてくれる事に驚いているようだが蓮夜は気にする事はなく、

「それじゃあ、行ってくるから、坂本代表、島田さん、仕切りはよろしく」

「お、おう」

「はい。わかりました」

蓮夜は雄二と美波にクラスの事を頼むと購買に言ってしまい、

「……ウチ、久島先生がモテる理由がわかった気がするわ」

「そうですね。頼れるお兄さんみたいで、ちょっと憧れちゃいますね」

美波は蓮夜が初日にも関わらず女子生徒から告白された理由がわかったようであり、瑞希は美波の言葉に頷くが、

（……気にするな。久島先生と明久の姉貴が仮にそう言う関係でも俺には関係ないはずだ。久島先生がモテても関係ない）

雄二はどうしても蓮夜と玲の関係が頭をよぎって行くようで大きく首を振ってその考えを振り払うと、

「始めるぞ」

雄二はクラスの指揮を執って清涼祭の準備を始めて行く。

第２６問

「久島先生、こんなところで何をしているんだ？　あのバカどもはまた逃げ出したのか？」

「西村先生、違いますよ。ちょっと、買い物です」

「洗剤？」

蓮夜が購買で洗剤や掃除に使えそうな道具を買い込んでいると西村教諭が蓮夜に気づき、声をかけるが蓮夜の手の中にある洗剤に首を傾げる。

「西村先生も知っての通り、Ｆクラスは飲食店なわけですし、今の状態じゃ、お客さんは呼べませんから」

「確かにそうだが……久島先生、自腹ですか？」

「まぁ、これくらいは出さないと……生徒達に点数取りと思われますかね？」

蓮夜は冗談を交えながら清涼祭の出し物のために必要だと笑うと、

「まったく、久島先生、後であのバカどもに差し入れでも買ってやってくれ」

「西村先生がご自分で差し入れをすれば良いじゃないですか？」

「あいつらは俺からの差し入れだと、何か裏があるとか言いかねな

いだろ。それに新任の久島先生が出しているのに俺が出さないとかっこが付かないだろう」

「ありがとうございます」

西村教諭は財布からお金を取り出して蓮夜に後でFクラスに差し入れをしてやって欲しいと言うが蓮夜は西村教諭が自分を間に入れる必要性を感じないようで首を傾げるが西村教諭は彼なりの照れ隠しなのか苦笑いを浮かべ、蓮夜は西村先生に頭を下げると差し入れの飲み物と洗剤の会計を済ませて直ぐにお釣りを西村教諭に返す。

「しかし、教師になってみて思いましたが、自分の時もですが先生って苦労してますね」

「福原先生にあの後にもう少し話を聞いたんだが、久島先生はずいぶんと福原先生や他の先生にも迷惑をかけていたみたいだな」

「……そんな事はないですよ」

蓮夜は差し入れを一先ずは購買の冷蔵庫に保管して貰うと洗剤を手にしながら、西村教諭と雑談をしながら教室に戻ろうとすると西村教諭は福原教諭から蓮夜の学生時代の話を聞いたようで眉間にしわを寄せると蓮夜は西村教諭から視線を逸らし、

「なら、どうして、視線を逸らすんだ？」

「……いや、どちらかと言えば、自分も行動も生成もFクラスだったためか生活指導の担当の先生は苦手です」

「成績も？　高橋先生から聞いたんだが、大学時代は優秀だったと

聞いているんだが？」

西村教諭は蓮夜の口から出た蓮夜の昔の成績に首を傾げると、

「高校時代は部活をやってる間は底辺でしたよ。部活を辞めてからもしばらくは目的もなかったですし、勉強も嫌いでしたしね」

「なら、どうやって成績を上げたんですか？」

蓮夜は昔の事を思い出して苦笑いを浮かべると西村教諭は蓮夜にどうやって成績を上げたのかと聞き、

「福原先生や他の先生がケガで部活を辞めて腐ってた時にいろいろと気にかけてくれまして、それでいろいろと考えさせられました。それで自分も福原先生達のようになれたら良いなって、そんな話を幼なじみにしたら、1から勉強を叩きこまれました」

「そうですか。久島先生にも……久島先生の幼なじみと言う事は吉井のお姉さんですか？」

「えぇ。まぁ」

「……そうですか」

蓮夜は玲から勉強を教わったと言うと西村教諭は蓮夜が明久と幼なじみだと言う事を思い出して首を傾げるが蓮夜は西村教諭は明久に優秀な姉がいる事が信じられないようで眉間にしわを寄せる。

第27問

「しかし、それだけ優秀な姉がいるのにどうして吉井はあんなに成績が悪いんだ？」

「まぁ、それは明久の問題ですから、明久も玲もなんですが集中力は桁外れなんで、本当に勉強をする気になれば直ぐに成績は上がると思うんですが、今はまだその時ではないみたいで、そのうち自分でやろうって気になりますよ」

西村教諭は明久の成績が底辺な事に首を傾げると蓮夜は苦笑いを浮かべ、

「久島先生もそうだったようにか？」

「そうですね。そのうちイヤでも向きあわないといけなくなりますからね。就職が難しいからどこか大学でもと……他には一緒の大学に行きたいとか青春的な意味で」

「久島先生、青春的な意味はまだしも俺はそんな微妙に後ろ向きな大学受験はどうかと思うんだが……」

「そうですね。でもそれくらいでやっと火が点くって感じですよ。俺の時の友人達もそうでしたしね」

蓮夜は近いうちに明久は真面目に勉強するだろうと笑うが西村教諭は蓮夜の言葉は生徒達のためにならないと思ったようであり、眉間にしわを寄せるが蓮夜は自分の時代もそうだったと笑う。

「まぁ。そうかも知れないが……」

「西村先生、少し待ってください」

「ん？　どうかしましたか！？　久島先生って、ここは2階です！？」

西村教諭は蓮夜と明久の距離が近すぎる事が気になるようで教師としての距離を考えるように言うが蓮夜は西村教諭の言葉の途中で何かに気づいたようで持っていた洗剤と差し入れのジュースを西村教諭に渡し、廊下の窓からグラウンドに飛び降りようとすると、

『げっ！？　久島先生に鉄人まで！？　に、逃げるぞ』

「こら、逃げるな！！　お前達、準備はどうした？　サボるなと言ったばかりだろ！！」

西村教諭が蓮夜を止める声にグラウンドでサボっていた4名のFクラスの生徒が声を上げ、蓮夜は逃げないように言うが生徒達はその言葉を聞きいれるつもりもなく、当然、逃げだそうとするが、

「……まったく、逃げると次は当てるぞ」

『『『『すいませんでした！？　命だけは助けてください！？』』』』

蓮夜はボールペンを素早くポケットから抜き取り生徒達に向かい投げつけるとボールペンは深々とグラウンドに突き刺さり、生徒達はグラウンドに深々と刺さったボールペンに顔を引きつらせながらも、こんな人間離れをしている蓮夜に視線を向けるとは蓮夜は次は小銭

を投げつけるつもりようであり、数枚の硬貨を手に持って笑っている。その様子に生徒達は先ほどの須川の事もあるためか血の気が引いて行き直ぐに土下座をしてグラウンドに額を押し当てて命乞いを始め、

「ですから、久島先生、窓からグラウンドに出ないでください」

「あ。そうですよね。上履きのままグラウンドに出るのは不味かったですよね。すいませんでした。以後、気を付けます」

「……いや、俺が言いたいのはその事ではないんだが」

蓮夜は2階の窓からグラウンドに飛び降り、西村教諭は蓮夜の行動に声をあげるが蓮夜は苦笑いを浮かべて西村教諭に頭を下げるが西村教諭は眉間にしわを寄せ、

「西村先生、俺はあの4人を連れて教室に戻りますから、教室の方をお願いします」

「あぁ。お前達もあまり久島先生を困らせるんじゃないぞ」

蓮夜は西村教諭にFクラスの事を任せ、西村教諭は大きく肩を落とした後に教室に向かって歩き出し、

「さてと、仲間が一生懸命になっている時に自分だけ楽をしようと言う。そのふざけた根性を叩き潰してやろうか？　一先ずはグラウンド50周で良いぞ」

蓮夜は体育会系の血が騒ぎだしたようであり、生徒達に罰を与えると蓮夜の様子に逃げた方が危険だと判断した生徒達は顔を引きつら

せたままグラウンドを走り始める。

第２８問

「レン兄、お帰り？」

「久島先生、その４人はどうしたんだ？」

蓮夜がサボった生徒４人を引きずって教室に戻ると明久と雄二は西村教諭から話を聞いているのか顔を引きつらせるが、

「まったく、たかだか４２周で力尽きるなんて最近の子供は軟弱だな」

「……いや、ウチのグラウンドのトラックは１周３００メートルだから、１２キロ走らされるとそんなもんだろ」

「トラック？　坂本代表、何を言ってるんだ？　グラウンドを走る基本は外回りだろ」

蓮夜は生徒の軟弱さにため息を吐くが雄二は蓮夜がおかしいと言いかけるが雄二が思っている以上に蓮夜は体育会系であり、

「……お前ら、サボらないように気を付けるぞ」

雄二の一言にクラスの思いは１つになる。

「それで、他に何か手伝う事はないか？」

「いや、掃除を終えちまうと喫茶店は当日がメインだからな。メニュー決めとかは調理班に任せてあるし、これと言ってはないな」

「そうか。確かに大部、進んでいるみたいだしな」
蓮夜は何か手伝う事はないかと聞くが、蓮夜の思っている以上に雄二の指示は的確なようであり、作業は順調に進んでいるようである。
「特に何もないなら……ん？　どうかしたか？」
「あ、あの。久島先生、私、美波ちゃんと清涼祭の召喚大会に出るんですけど、少しお聞きしてもよろしいでしょうか？」
「勉強か？　かまわないよ」
瑞希は遠慮がちに手をあげると召喚大会の勉強をしたいようであり、蓮夜は瑞希の様子に苦笑いを浮かべると、
「レン兄、今更何だけど、レン兄ってなんの教科を教えるの？」
「あれ？　言ってなかったか？　一応は英語が担当教科だけどFクラスの担当だから、全部、教えてくれと言われてるぞ」
明久は蓮夜の担当教科を聞いていなかった事を思い出し、蓮夜は首を傾げた後、全ての教科を教えるように言われていると答え、
「英語か？　確かにレン兄は姉さんと一緒にアメリカに留学してるし、本場だよね」
「おい。明久、今の話はどう言う事だ？」
明久は蓮夜が留学していた事は知っていたようであり、その言葉に

雄二が驚きの声をあげ、

「久島先生って留学していたんですか？」

「あぁ」

「へぇ。どこの大学ですか？」

「ハーバード」

蓮夜が留学していたと言う話に瑞希と美波は興味が湧いたようであり、蓮夜にどこの大学に留学していたかと聞くと蓮夜の口からは冗談だと思うような大学の名前が出ている。

「久島先生、いくらなんでもそれは冗談だってわかるぜ」

「まぁ、冗談だと思うよな。俺も留学を知らされた時は冗談だと思ったしな」

「あの。留学って、久島先生が決めたんじゃないんですか？」

雄二は冗談にしては笑えないと言うが蓮夜も当時の事を思い出したようで苦笑いを浮かべると瑞希は蓮夜の様子に首をかしげ、

「あぁ。どう言う経緯か知らないが、朝、起きたらチケットとパスポートを持たされてな。着のみ着のまま、空港まで引っ張られて、わけがわからないうちにアメリカに連れて行かれた」

「……どう言う状況？」

「今更だけどわからん」

蓮夜の言葉は常識から外れ過ぎており、話を聞いていたメンバーは眉間にしわを寄せるが、

（……朝、起きたら？　大学時代に明久の姉貴と久島先生は同棲をしてたのか？　……いや、だから、余計な事を考えるな）

雄二だけは頭の中でいろいろなものが繋がって言っているようであり、顔を引きつらせる。

第２９問

「あ、あの。久島先生」

「何だ？」

瑞希は遠慮がちに蓮夜を呼び、

「あの。朝起きたらと言ってましたけど、久島先生は吉井くんのお姉さんと同棲していたんですか？」

（良く聞いた。姫路、これで俺の疑問が解ける……いや、待て。しかし、久島先生と明久の姉貴がそう言う関係だったとしたら）

瑞希は蓮夜と玲の関係が気になったようで少し恥ずかしそうに蓮夜と玲の関係を聞くと雄二は幼なじみが付き合うと言う話は聞かない方が良い気がするようであり、眉間にしわを寄せると、

「ひ、姫路さん、おかしな事を言わないでよ。レン兄と姉さんが付き合うような事は『絶対』にないよ。そんな事があったら、僕はおじさんとおばさんに申し訳なさ過ぎて土下座しないといけなくなる！！」

「明久……お前の土下座になんの価値もないからな」

「ちょっと、レン兄、ここでそれを言うのはおかしいからね！？」

「いや。土下座ってそれなりにプライドや地位のある人がやるから意味があるのであって、お前の土下座には価値はないんだ」

「真剣な表情で言わないでよ！？」

明久は蓮夜と玲の関係を本当に何も知らないようであり、そんな事はあり得ないと叫ぶと蓮夜は明久の肩を叩くと真剣な表情で明久をからかい、

（……久島先生と明久の様子からじゃ、まったくわかんねえな。明久は本気で久島先生と姉貴が付き合うのは嫌がってる気もするし、それとも、ウチのクラスの性質上、ここで話したら行けないと思ってるのか？　……いや、明久にそんな事を気づかう知能はない）

雄二は2人の様子から事実を見極めようとする。

「それで、久島先生は吉井くんのお姉さんと同棲していたんですか？」

「姫路さんの質問の回答としては同棲をしていたわけじゃないな。俺も玲も大学の学生寮に入ってたんだけど、割と規則が緩いところでな」

「そうなんですか……」

「何か、残念」

瑞希は明久をからかっている蓮夜にもう1度、聞くと蓮夜は苦笑いを浮かべて同棲はしていないと言い切り、瑞希と美波は年上の蓮夜から聞ける恋愛話に期待していたようで残念そうな表情をするが、

（良し。同棲はしていない。セーフだ）

雄二は雄二は小さくガッツポーズをし、

「なるほどね」

「レン兄、どうかしたの？」

「いや、何もない」

蓮夜は雄二が自分の話を聞いて考えている事が手に取るようにわかるようで楽しそうに笑うと明久は蓮夜の様子に首を傾げ、蓮夜は何もないと笑いながらも、

（……坂本代表は霧島さんとの事を俺と重ねているみたいだからな。面白そうだから、もう少し遊ぼう）

自分の中で雄二をからかう材料を手に入れたようで楽しそうに口元を緩ませる。

「それじゃあ、姫路さん、勉強だったね。ん。せっかくだ。明久と坂本代表も召喚大会に出るわけだし、一緒にやるか？」

「え？　いや、僕は……」

蓮夜は自分の話をここで切ると瑞希に勉強を教えるついでに明久と雄二の勉強も見ると言うと明久は後退を始め出すが、

「……俺もすべてに対応ができないから、坂本代表の質問に答えている間に姫路さんに質問すれば彼女の胸元を覗きたい放題」

「仕方ないな。僕も召喚大会に出るわけだし、少しくらいは勉強をしておくとするよ」

蓮夜は明久の扱い方を心得ており、明久の耳元でささやくと明久は蓮夜の口車に乗せられる。

第３０問

「島田さんはドイツからの帰国子女だったね」

「は、はい。それで、問題が読めなくて……」

「あぁ。それなら」

蓮夜は美波の質問に少し考えるとドイツ語なのか美波にわかるように説明し始め、

「……明久、久島先生はドイツ語も話せるのか？」

「僕も初めて知ったよ」

雄二は蓮夜の万能さに眉間にしわを寄せると明久も蓮夜がドイツ語を話せる事を初めて知ったため、苦笑いを浮かべると、

「久島先生はどうしてドイツ語を話せるんですか？」

「留学時代にね。語学は基本だし、英語がメインだけど色々と覚えた」

美波は信じられないようで勉強などどうでも良くなったようで蓮夜に質問をし、蓮夜は苦笑いを浮かべ、

「そうなんですか？　それなら、言葉を覚えるコツをウチに教えてください」

「コツ？　……気合と根性？」

美波は蓮夜に日本語を覚えるためにコツを教えて欲しいと頼むが蓮夜はどこか体育会系であり、

「あの。久島先生、美波ちゃんが教えて欲しいのはそう言うのじゃないと思うんですけど」

「言葉なんか無くたってジェスチャーと気合でどうにかなる」

瑞希は蓮夜の言葉に苦笑いを浮かべるが蓮夜は迷う事無く言い切り、

「……久島先生はどこか、Ｆクラス臭がするんだが、明久、久島先生って本当に頭が良かったのか？」

「そう言われるとあまり、レン兄が勉強をしてる姿って記憶にない。高校の３年に上がるちょっと前から、姉さんに勉強を教わっていた気はするけど」

雄二は蓮夜の話からところどころに漏れ出るバカな発言に眉間にしわを寄せると明久は当時の蓮夜を思い出して首を傾げる。

「明久、坂本代表、そっちは大丈夫なのか？」

「あぁ。俺は問題ない」

「へぇ、流石は、神童と称された事はあるな。それに比べて明久はバカだな」

「ちょっと、レン兄！？　僕のノートを何１つ見てないのに直ぐに

罵倒ってどう言う事だよ！？」

蓮夜は集中していない2人に声をかけ、覗きこんだ雄二のノートを見て感心したように頷くと明久のノートを見る事無く明久を罵倒し、

「これなら、来年は霧島さんと同じ、Aクラスになれるんじゃないか？」

「な、何で、翔子の名前が出てくるんだよ！？」

明久が叫んでいるのを無視して雄二をからかいに移り、雄二は蓮夜の言葉に驚きの声をあげると、

「違うのか？　この間の試召戦争があって正式に婚約者になったって聞いたんだけど」

「なってねぇよ！！　だいたい、そんなガセネタをどこで聞いたんだよ！！　昨日も言っただろ。俺と翔子は『ただの幼なじみ』であってそんな事実はねえ！！」

蓮夜は首を傾げながら、明久達が2年生になって直ぐに行った文月学園の特殊なカリキュラムである試召戦争の結果を聞いているのかその時に行われた雄二と翔子の約束事の事を話し、雄二はそれをガセネタだと叫ぶが、

「さっき、グラウンドで霧島さんからね。後……坂本代表、それを霧島さんの前で言ったら、教師としてではなく、人間としてぶっ飛ばすぞ。自分の弱さを他人にそれも大切な人になすりつけてはいけない」

「お、おう」

蓮夜は雄二の言葉に反応したのか目つきが鋭くなり、雄二は蓮夜の様子に気落とされたようで頷いてしまう。

第３１問

「それじゃあ、真面目にやるか……ん？　まだ、何かあるのか？」

「結局、久島先生は留学先で何の勉強をしておったのじゃ？」

蓮夜は雄二が頷いた事にくすりと笑うと勉強に戻ろうとすると５人の様子を見ていた秀吉が蓮夜の留学先での事を聞き、秀吉の質問に教室の生徒達の視線が集中し、

「えーと、一応は保健体育の実技を」

「……久島先生、詳しい話を聞かせて欲しい」

蓮夜は苦笑いを浮かべて冗談らしき事を話すと『土屋康太』を中心に生徒達が蓮夜の言葉に食いつき、

「言って置くぞ。お前達の期待しているようなスケベな事じゃないからな。スポーツ力学やリハビリとかの勉強だからな」

蓮夜は生徒達の期待を裏切り、生徒達はその場に膝を付き血涙を流し始め、

「あ、あの。どうして、そんな専門的なものを勉強していたのに先生をしているんですか？」

「そうよ。それを生かせる仕事があるんじゃないですか？」

瑞希と美波は蓮夜の経歴から日本で臨時職員の教師をやっている意

味がわからないと聞くが、

「えーと、明久から聞いているかわからないけど、高校時代は空手をしていたんだけど、そこで練習中にケガをしたんだ。その時は何も考えずにがむしゃらに練習すれば強くなれるとは思ってたんだけど、まぁ、ぶっちゃけ、オーバーワークだな。ウチの部活は顧問しかいなくて、同じように根性だ。気合いだ。ってタイプの先生だった。確かにそう言う部分もあるんだけど、やっぱり、それだけじゃないんだ。スポーツに力を入れてるところは科学的なメニューも取り入れてるんだ」

「レン兄……」

蓮夜は当時の事を思い出しているようで少しだけ寂しそうに笑うと明久も蓮夜が腐っていた時の事を思い出したようで目を伏せる。

「勉強をしたのは自分のため、どこかであの時にこう言う考えができたらって考える自分を冷静に見るため、後は同じ間違いをして欲しくないからかな？　指導者になるよりは教師の方が目線が近いと思ったし、生徒達と指導者の間に入る人間が居ればケガをする生徒も減ると思ってさ。まぁ、それで前の学校はクビになったけど」

「クビですか？」

「あぁ。臨時職員なのに監督（おれ）の指導方針に文句を言うなってな」

蓮夜は教師として失敗した人間として他に自分と同じ思いをした人間を増やしたくないために教師になった部分もあると言うが蓮夜の性格では争いは絶えなかったようで臨時職員と言う立場の弱い蓮夜はそのために仕事先を転々としていたようであり、

「それって、おかしくない？」

「まぁ、おかしいのかも知れないけど、これが現実。指導者にとって生徒は自分の名前を売るための使い捨ての駒。生徒達のためって言うけど、ケガをした人間のフォローはしない。まぁ、この学校の先生はきちんと考えてくれてるみたいだから、安心したけど、この学校、そのうちスポーツ面でも名前が出てくると思うぞ」

「そうなの？」

美波は蓮夜を追い出した学校が信じられないようで不機嫌そうな表情をすると蓮夜は彼女の性格を好ましく思っているようでくすりと笑った後、文月学園の部活を取り仕切っている人間は優秀だと言い、明久は蓮夜の言葉に首を傾げると、

「あぁ。運動部の顧問の先生は独学だけど勉強もしっかりしてるし、大島先生を筆頭に保健体育の先生達の知識も半端ない。正直、留学してまで勉強したのに自信をなくすな…って、俺の話は良いんだよ。ほら、続きをやるぞ。他にも勉強教えてほしい奴は集まれ」

蓮夜は文月学園の教師陣のレベルの高さに驚いているようで自分はまだまだだと苦笑いを浮かべると勉強に戻ろうと他にも参加者はいないかと聞くと生徒達は蓮夜の言葉から逃げるように作業に戻って行く。

第３２問

「そう言えば、レン兄って、どこに住んでるの？　おじさんとおばさんと一緒に住んではないよね？」

「あぁ。近くに部屋を借りてるぞ」

勉強を始めてしばらくすると明久は飽きてきたようで蓮夜がどこに住んでいるかと聞き、

「１人暮らしですか？」

「……姫路さん、何を聞きたいんだ？」

瑞希は蓮夜の恋愛話を諦めてなかったようで、蓮夜が女性と住んでいるのではないかと聞くと蓮夜は大きくため息を吐く。

「えーと、やっぱり、気になるんです」

「ウチも気になります。久島先生は彼女がいるんですか？」

瑞希は苦笑いを浮かべると美波も気になっていたようで前のめり気味に質問をし、

「黙秘権を行使する」

「どうしてですか！？」

「どうしてよ！？」

蓮夜は2人の様子に苦笑いを浮かべると瑞希と美波は声をあげると、

「ん？　何か、俺だけ搾取されてるみたいだから、それに今は勉強（こっち）の時間だと言っているだろ。集中しなさい」

「……なぁ、明久、お前は久島先生の学生時代に彼女がいたとか知らないのか？」

蓮夜が瑞希と美波に集中するように言っている近くで雄二は明久を肘で突き、明久に蓮夜に過去に彼女がいなかったかと聞くが、

「学生時代？　……記憶にない。レン兄は女友達も多かったけど、彼女がいるとかは聞いた事がないかな？」

「そうか……役立たずが」

明久は蓮夜が玲と付き合っていた事に本当に気付いていないようで首を傾げ、明久の様子に雄二は舌打ちをする。

「雄二、役立たずってどういう意味だ！！」

「あ？　そのままだろ」

「やるのか。バカ雄二！！」

「あ？　上等だ。表出ろ。バカ久！！」

雄二の舌打ちに2人は睨み合いを始め出し、

「明久、坂本代表、殴り合いなら外でやれ。せっかく、掃除をしたのに埃が舞うだろ」

「……久島先生、止めなくて良いのか？」

蓮夜は2人を止める事なく、秀吉は大きくため息を吐くが、

「青春とは時にぶつかりあうものなんだ。その代わり、半端な決着は許さないけどな」

「……雄二、争いは良くないよね」

「そうだな」

蓮夜はお互いに精根尽きるまで殴り合えと言い切り、蓮夜の様子に明久と雄二は下手な事はしない方が良いと思ったようで席に戻ると、

「ん？　行かないのか？」

「あ、当たり前だよ。僕は召喚大会を優勝するために勉強をしないといけないんだから、ねえ、雄二」

「あぁ。当然だ。久島先生、日本史をメインで教えてくれ。明久はバカだから、何教科も頭には入らないしな」

蓮夜は笑顔で明久と雄二に聞くと2人は蓮夜から被害を受けないように勉強の話に戻す。

「了解。それじゃあ、戻るぞ」

「久島先生、まだ話は終わってないです」

「そうよ。別に減るものじゃないんですから、教えてくれたって良いじゃないですか！！」

「……雄二とのデートの参考にしたい」

蓮夜は明久と雄二の言葉に頷き、勉強に戻ろうとするが瑞希と美波は納得していないばかりかいつの間に翔子が雄二の隣に陣取っており、

「……増殖しているな」

「しょ、翔子、お前、どこから湧いて出てきた！？」

蓮夜は翔子を加え、戦力を増した女子生徒に大きくため息を吐き、雄二は翔子の登場に驚きの声をあげる。

第３３問

「とりあえずは霧島さん、教室に戻りなさい」

「……どうして？」

蓮夜は翔子に教室に戻るように言うが翔子は蓮夜の言葉の意味がわからないようで首を傾げると、

「久島先生、翔子ちゃんだけ、仲間はずれにするなんてダメです」

「そうよ。霧島さんにだって聞く権利はあるはずよ」

なぜか瑞希と美波は蓮夜の恋愛話が聞けると決めつけており、

「……その前に、俺が自分の恋愛話を話す義務はないからな。それに霧島さんはＡクラスの代表だろ。それなのにクラスをほったらかして他のクラスに来てはダメだ。今は清涼祭の準備時間であり、担任と代表の指示で清涼祭の準備をする時間であって無駄話をする時間ではない」

「……クラスは優子がまとめてくれる。だから、大丈夫」

蓮夜は大きくため息を吐き、翔子に教室に戻るように言うが翔子は代役を立ててきたため、問題ないと言い切る。

「あのな。そう言う問題じゃない。霧島さんの責任感の問題だ。自分勝手な事ばかりしているとクラスがまとまらなくなって後々に困る事になるぞ。代表としてだけではなく、人間として、今、やって

はいけない事をしている事に気づきなさい」

「……でも」

蓮夜は翔子に自分勝手な事はしてはいけないと言うが翔子は納得がいかないようであり、蓮夜に何かを言おうとした時、

『霧島さんに意見するなんて許せねえ』

『あの男はやっぱり、八つ裂きにするべきだ』

こちらの様子をうかがっていたFクラスの生徒達は翔子の全面的な味方をしたいようで蓮夜に対して殺気混じりの視線を向け始めるなか、

「もう1度だけ言うぞ。自分の教室に戻るんだ」

「……イヤです」

蓮夜は生徒達の視線など気にする事なく、少しだけ口調を強めて翔子に再度、Aクラスの教室に戻れと言うが翔子は真っ直ぐに蓮夜を見返し、

「そうか……悪いな。霧島さんをAクラスに戻してくる」

「……放して。雄二、助けて」

蓮夜は翔子の首をつかむと翔子を引きずって教室を出て行こうとすると翔子は雄二に助けを求める。

「翔子、言って置くが久島先生が正しいからな」

「何を言ってるんですか。坂本くん、坂本くんは翔子ちゃんを助けるべきです！！」

「そうよ」

しかし、雄二は翔子を見捨て、その雄二の行動は瑞希と美波に火を点ける事になり、

「ま、待て。どうして、俺が怒られないといけないんだ！？　て、てめえ、明久、何をする！！」

「何を、決まってるだろ。僕は貴様のような不細工がこの世に存在しているのが許せないんだ。お前みたいな不細工がよりにもよって霧島さんの隣にいるなんてゆるせるわけがないだ！！　今の僕なら嫉妬で貴様を殺せる！！」

雄二は瑞希と美波に落ち着くように言っているなか、明久の右ストレートが雄二の顔面に向けられ、雄二はその攻撃を何とか交わすと明久は雄二に向かって吠えるが、

「殺人は犯罪だ。後はお前は人の事を言えるほどの顔じゃないだろ」

「何を言ってるんだよ。僕は３６５度、どの角度から見ても美少年じゃないか！！」

「明久、これを渡すから、やっておけ」

蓮夜は明久を止めると明久に小学１年生向けの算数ドリルを渡し、

「算数ドリル？」

「明久、辛いかも知れないが、お前はそこからやらないと無理だ。姫路さん、島田さんも遊んでいるヒマがあるなら自習をしていなさい」

明久は蓮夜に渡されたドリルの意味がわからないようで首を傾げるが明久は彼の肩に手を置いて優しい声で言う。

第３４問

「失礼します」

「……」

蓮夜は翔子をＡクラスの教室に連れ戻す過程でＦクラスの生徒数名から襲撃に遭うが蓮夜が後れを取るわけもなく、チョークで生徒達を沈めた後、納得がいかなさそうな表情をした翔子の連れてＡクラスのドアを開けると、

「代表、どこに行ってたんですか？　清涼祭も近いんですから、勝手にいなくならないで下し」

「優子も落ち着きなよ。代表は坂本くんに会いに行ってたんだろうし……代表、この人、誰？」

翔子の姿を見て２人の女子生徒が駆け寄ってくるが見慣れない蓮夜を見て１人が首を傾げる。

「……吉井のお義兄さん」

「吉井くんのお兄さんがどうして文月学園にいるんですか？　それも代表と一緒に」

「優子、ボクの気のせいかもしれないけど、何かニュアンスが義理のお兄さんって感じじゃなかった？」

翔子は蓮夜を明久の兄として紹介すると女子生徒２人は状況がつか

めていないようであり、

「えーと、俺は」

「久島先生、こんなところで何をしているんですか？」

「高橋先生、すいません。Ｆクラスに霧島さんが着ていたんで、Ａクラスの準備もあるだろうから連れてきました」

蓮夜は自分の名前を名乗ろうとした時、蓮夜を見つけた洋子が駆け寄ってくるとＡクラスの生徒達の視線が蓮夜に集まり、

「久島先生？」

「えーと、昨日から、Ｆクラス担当で臨時職員として務めさせて貰ってます。久島蓮夜です」

「そうなんですか？　ボクは『工藤愛子』です」

「『木下優子』です」

蓮夜は名前を名乗ると蓮夜の前にいた女子生徒は蓮夜につられるように名前を名乗る。

「工藤さんと木下さんだね。よろしくお願いします……木下さん、Ｆクラスの木下くんの」

「あ、あたしが姉です。愚弟（おとうと）がお世話になってます」

蓮夜は優子の顔を見て秀吉との関係を聞くと優子は姉として秀吉の

事を蓮夜に頼み、

「いや、世話をするほど、俺はまだ何もしてないよ。それに木下くんは落ち着いているし、こっちの方が助かってるよ」

「そ、そうですか」

蓮夜はクラスでは落ち着いた様子の秀吉の顔を思い浮かべて苦笑いを浮かべると優子はほっとしたのか胸をなで下ろすと、

「あ、あの。久島先生、代表が吉井くんのお義兄さんって言ってましたけど」

「幼なじみだよ」

「……吉井のお姉さんの旦那様」

愛子は翔子のした蓮夜の紹介が気になるようで蓮夜と玲の関係を聞く。しかし、蓮夜は生徒達に言う事ではないと思っているため、苦笑いを浮かべて玲との事を伏せようとするが翔子の中では蓮夜の口から直接、聞いたわけでもないのに確定事項になっており、

「……霧島さん、他人(ひと)の言葉を聞きいれると言う事を覚えような」

「……代表」

蓮夜は翔子の様子に大きく肩を落とすと優子は蓮夜と翔子の噛みあわない会話に苦笑いを浮かべるが、

「久島くん、玲ちゃんといつ、別れたんですか？　やはり、遠距離

恋愛は難しかったんですか？」

「……洋子先輩、空気を読んでください。生徒に話す事でもないでしょう」

洋子は蓮夜と玲の関係を知っているようで首を傾げ、蓮夜は眉間にしわを寄せる。

第３５問

「す、すいません。そうでしたね」

「まったく、相変わらずですね……どうした？」

洋子は蓮夜の言葉に慌てて頭を下げると蓮夜は洋子の様子に苦笑いを浮かべていると蓮夜の洋子の様子に翔子、優子、愛子は何かあるのか蓮夜に視線を向けており、

「あの。久島先生と高橋先生って知り合いなんですか？　先輩って言ってましたけど、高橋先生もくん付けで呼んでましたし」

「……あぁ。高橋先生は大学時代の先輩だ。失敗した。気を付けてたつもりだったんだけど気を抜いちまったな」

愛子は蓮夜と洋子の関係にも興味があるようであり、蓮夜は呼び慣れていた言葉が出てしまった事に失敗したと言いたげに頭をかくと、

「……高橋先生、久島先生の彼女はどんな人？」

「玲ちゃんですか？　……」

「……ですから、それは生徒に話す必要はないです」

翔子は蓮夜を落とすよりは洋子から情報を聞き出した方が良いと判断したようで洋子に玲の事を聞き、洋子は蓮夜が言っているそばから口を滑らそうとする。

「えーと、久島先生が吉井くんのお姉さんと付き合ってるのは吉井くんは知っているんですか？」

「いや。明久にはまだ話してないよ。玲が何か明久をからかって遊びたいみたいで秘密にして明久だけには欲しいと言われたからな。後はそう言うのが保護者とかにばれると特定の生徒を贔屓しているとか言いだす人間もいるから、秘密にしておきたかったんだ」

優子は明久が蓮夜と玲の関係を知っているのかと聞くと蓮夜は教師として明久と接するためにも秘密にする事は必要であったと言い、

「久島くん、すいませんでした」

「まぁ、これ以上は何も言うつもりはないですよ。その代わり、この話はこれで終わりでお願いします。後は学園内でくん付けは止めてください」

「そ、そうでしたね。すいません」

洋子は蓮夜の言い分は正しいためか申し訳なさそうに肩を落とすと蓮夜は洋子を責めるつもりはないようでため息を吐くと優子と愛子、それ以外にも聞き耳を立てていたAクラスの生徒達は蓮夜の言葉に納得したようであり、ここで蓮夜と玲の話は切り上げようとするが、

「……久島先生、詳しい話を聞かせて欲しい」

「……霧島さん、俺の話を聞いていたか？」

翔子だけは蓮夜と玲の関係を話せと蓮夜に詰めより、蓮夜は眉間にしわを寄せる。

「……私が吉井に話さなければ良い話」

「その前に他人(ひと)のプライベートに土足で踏み入ろうとする非常識さに気づきなさい。無頓着に他人や友人のプライベートに踏み込もうとすると友人を失う事になるぞ」

「……」

翔子は明久に話さなければ問題ないと思いこんでおり、蓮夜は翔子を非常識だと言った後、翔子に行動を改めるようにと軽く説教をするが翔子は納得がいかなさそうな表情をしているが、

「それじゃあ、俺はそろそろ戻ります。ウチのクラスは見張りがいないと遊び始めるんで」

「はい。久島先生、頑張ってくださいね」

蓮夜は翔子の様子に苦笑いを浮かべると洋子に頭を下げてからFクラスの教室に戻って行く。

第３６問

「……坂本代表、何があったんだ？」

「……一般人に説明がしにくいんだよな」

蓮夜が教室に戻ると教室は真紅に染まり、明久が今にも事切れそうな『土屋康太』を抱きかかえて血涙を流し、彼を『ムッツリーニ』と呼んでおり、蓮夜は目の前に映る信じられない状況に顔を引きつらせて代表の雄二に状況を聞くと雄二はどう説明して良いのかわからないようで眉間にしわを寄せる。

「久島先生、雄二、そんな事を言っている場合ではないのじゃ！？ムッツリーニの手当てが先なのじゃ」

「そうだな。えーと、とりあえずは明久、その体勢はダメだ。鼻血がのどに逆流するから、後は止血だけど……この出血量は不味いよな」

秀吉は状況説明より康太の治療だと叫び、蓮夜は鼻血の応急処置をして行くが出血量が多すぎるため、眉間にしわを寄せると、

「……久島先生、俺のカバンの中に輸血パックが」

「……なんか突っ込みどころが多いが、背に腹は代えられないな。誰か。土屋のカバンを」

「は、はい」

康太は最後の気力で自分のカバンの中に輸血パックがある事を伝え、蓮夜はなぜ、康太が輸血パックを持っているか疑問に思いながらも、瑞希から康太のカバンを受け取ると康太に輸血を開始する。

「……とりあえず、掃除班と土屋の様子を見る人間に分かれてくれ。後は坂本代表、説明を頼む」

「あぁ」

蓮夜は康太の鼻血が止まったため、真紅に染まった教室の掃除を生徒達に指示を出し、雄二に説明を再度求めると雄二は苦笑いを浮かべたまま頷くと康太が鼻血な大量に噴き出した原因を話し始め、

「……ずいぶんと困った体質だな」

「だよな」

康太が『寡黙なる性職者』と呼ばれている事や鼻血を大量に噴き出す事がある事を聞き、眉間にしわを寄せると雄二は蓮夜の言いたい事がわかるようで頷き、

「まぁ、起きたものは仕方ないが、土屋くん」

「……なんだ？」

「スキを狙って女の子達のスカートを覗こうとしない事、それは正々堂々と本人に見せて下さいと懇願するものだ」

「……それは聞けない。久島先生はチラリズムの素晴らしさを何もわかっていない」

蓮夜は今回、康太が鼻血を噴き出した原因が美波に向かって余計な事を言った明久に美波がお仕置きで関節技をかけた時の彼女の下着を覗き込んだ事とも聞いたため、彼の行動を間違っていると言うが康太は蓮夜の言葉には頷けないとフラフラになりながらも立ち上がり、蓮夜の目をしっかりと見て言い返し、

「いや、問題はそこじゃないだろ」

「まったくなのじゃ」

雄二と秀吉は蓮夜と康太の様子にため息を吐く。

『そうだ。久島先生は何もわかっていない！！　俺は土屋を応援するぞ』

『そうだ。頼みこんで見れるものなら、いくらでも土下座をしてやる。それで見せて貰えないから、覗くんじゃねえか！！』

生徒達の大半は康太に同調して叫び始め、

「……良いか。お前ら、それは犯罪だからな」

『うるせえ！！　勝ち組みたいなことを言いやがって、やっぱりあの男は異端者だ。総員、あの男の臓物を我らが異端審問会に奉げるのだ！！』

蓮夜は生徒達の様子に大きくため息を吐く姿に生徒達は怪しげな覆面をかぶり始めるが、

「なるほど、先生方から、Ｆクラスへの体罰は目をつぶると指示がある理由がわかったな」

蓮夜は大きく肩を落とした後、教室には１匹の鬼神が舞い降り、覆面を被った生徒達を１人残らずぶっ飛ばし、放課後には校庭の外周を走らされている生徒達の姿があった。

第37問

「……明久、お前、何をしてるんだ？」

「レ、レン兄、何をしてるって、どうしてそんなに平然としてるの？」

蓮夜は夕飯の材料を買い終えて家に帰る途中、先ほどのランニングがきつかったのか明久がふらふらと歩いており、一緒に走っていたにも関わらずに平然としている蓮夜の様子に明久は驚きの声をあげるが、

「ん？　これくらいは余裕だ」

「……レン兄、部活、止めた後も結局、走ってたりしてたの？」

「まぁ、体力維持くらいでな。それに運動していた人間が急に運動しなくなるのも身体に悪くてな……明久、ずいぶんと良い音で泣いたな」

蓮夜は別に何ともないと笑った時、明久の腹の虫が盛大に泣き始め、

「だ、だって、あれだけ走ったし。それに……」

「明久、何を隠してる？」

「な、何も隠してないよ」

「なら、目を泳がせるな」

明久は蓮夜に何か隠してあり、蓮夜は大きくため息を吐くと、

「怒らない？」

「内容しだいだ」

明久は蓮夜に怒られると思っているようで顔を引きつらせながら聞き返す。

「えーと、仕送りを使いきって、食費がない」

「そうか。次の仕送りまで何日だ」

「えーと、３週間」

「明久、歯を食いしばれ」

明久は仕送りを使い込んでしまったようだが、使いきるにしてもあまりに早すぎ、蓮夜は笑ってはいるが額には青筋が浮かんでおり、

「ま、待ってよ！？　気を付ける。これからは気を付けます」

「……まったく、明久、帰るぞ」

「へ？　どう言う事？」

明久は蓮夜の様子に本気で怒っている事に気づき、慌てて頭を下げると蓮夜はため息を吐いた後、明久に付いてくるように言い、明久は意味がわからないようで首を傾げると、

「今日の夕飯くらい食わせてやる」

「ホ、ホント！？」

「その代わり、今日の事はおじさんとおばさんに報告するからな」

蓮夜はこのまま明久を帰すわけにもいかないため、夕飯を食わせてやると言い、明久は目を輝かせるが蓮夜はこのままでは明久の生活を正すために明久の両親に連絡すると告げる。

「ま、待って。それはダメだよ。そんなことしたら、僕の自由な生活が」

「……明久、そんなふざけた生活をしていて死んだら、どうするんだ？　自由を守りたいって言うなら、しっかりとした生活をしないとためだ」

明久は両親に今の生活を教えられたら終わりだと思っているようで蓮夜に思い直すように言うが蓮夜は明久の意見を跳ねのけた時、

「吉井くんに久島先生？　お買い物ですか？」

「姫路さん？　どうしたの？」

「夕飯の買い物をね。明久とはさっき会って家で夕飯を食べる事にしたんだ」

瑞希が2人を見つけて駆け寄ってきて、蓮夜はこれから自分の家で明久と夕飯を食べると話し、

「姫路さんも夕飯の買い出しか？」

「は、はい。急にお父さんとお母さんが出かける事になってしまって、それで1人ですし、お料理の練習も兼ねて何か作ろうかと思いまして」

蓮夜は瑞希は何をしているのかと聞くと彼女は食材を買いに来たと答えるが、

「……明久、何かあったのか？」

「レ、レン兄、姫路さんに料理をさせたらダメだ。姫路さんが死んじゃうよ」

明久は蓮夜の腕を引っ張ると瑞希が自分の料理で死ぬとおかしな事を言い始め、

「……明久、頭、大丈夫か？」

「僕は正気だよ！！　姫路さんの料理は危険なんだ。だから、何とか彼女が料理をするのを考え直させて」

蓮夜は眉間にしわを寄せるが明久の表情は鬼気迫る感じであり、

「姫路さん、それなら、ウチにくるか？」

「良いんですか？」

「まぁ、もう1人くらい増えても変わらないしな」

蓮夜は明久の様子にただ事ではないと思ったようで彼女に料理を考えさせるために瑞希を夕飯に誘うと瑞希は明久と一緒に居れる事が嬉しいのか目を輝かせる。

第３８問

「お邪魔します」

「お邪魔します」

「別に誰もいないんだ。気にしなくて良いぞ」

蓮夜が家のカギを開けると明久と瑞希は遠慮がちに玄関に上がり、

「俺は着替えてくるから、適当にテレビでも見ててくれ」

「う、うん」

「あ、あの。ごちそうになるのは悪いので私が夕飯を作ります」

蓮夜は着替えるために寝室に移動利用とすると瑞希が自分が夕飯を作ると言いだし、

「ひ、姫路さん、な、何を言ってるんだよ」

「吉井くん、どうしました？」

明久の顔から血の気が引き始めるが瑞希は殺る気になっているようで両手を可愛く握っているが、

「悪いな。俺、キッチンに他の人が入るのはあまり好きじゃないんだ」

「そうなんですか？」

「あぁ」

蓮夜はあっさりと瑞希の言葉を交わし、瑞希は残念そうな表情をするのとは対照的に明久は安心したのか胸をなで下ろしている。

「うーん。何を作ろうかな？　カレーでも良いか？」

「うん。僕は良いよ」

「は、はい。私も大丈夫ですけど……」

「あまり辛くない方が良いね」

「……はい。お願いします」

蓮夜は着替えてキッチンに入ると基本的に1人分しか料理を作らない事もあるためか、冷蔵庫の中にある材料を見てカレーに決めると瑞希は辛い物はあまり得意ではないのか申し訳なさそうに視線を逸らし、蓮夜はそんな彼女の様子に苦笑いを浮かべると料理を始めて行き、

「ん？　そうだ。明久」

「何？」

「さっき、母さんに今のお前の状況を連絡したら、朝と夕、ウチで飯を食うように伝えておけと言われてな。朝、寝坊するなよ」

「そ、そんな、悪いよ」
蓮夜は着替えている間に明久の食生活を考えて明久の家と同じマンションに住んでいる両親に連絡していたようで、明久の明日からの朝夕の食事を確保しており、明久は流石に迷惑をかけられないと慌てるが、
「拒否権はなし。それに昔は毎日のようにきてたんだ。気にする間柄でもないだろ」
「だけどさ」
「悪いと思うなら、次に仕送りがきた時は考えて使う事」
「う、うん」
蓮夜に敵うわけもなく、明久は申し訳なさそうに肩を落とす。
「あ、あの。久島先生、吉井くん」
「ん？　悪いな。俺が明久と話してたら姫路さんはヒマだな。明久、居間に行ってろ」
「う、うん」
瑞希は蓮夜と明久が話をしている姿に居心地の悪さを感じてしまったようで遠慮がちに声をかけると蓮夜は明久に瑞希の相手をするように言い、明久は居間に移動して行くが、
「レン兄って、帰ってきたら何してるの？」

「ん？　どうかしたか？」

「いや、あまり、やる事もないからさ」

明久と瑞希は始めてくる蓮夜の部屋に何を触って良いのかわからないため、周囲を見回しており、

「あぁ。そうだな。姫路さん、テレビの横の本棚にある赤いアルバムなんだけど」

「これですか？」

「明久の小さな頃のお風呂の写真が」

「ちょ、ちょっと、レン兄、何でそんなものを持ってるんだよ！？
姫路さんも何でそのアルバムに手を伸ばすんだよ！？」

蓮夜は何かを思いついたようで瑞希に明久の小さな頃の写真があると言うと瑞希は直ぐに手を伸ばすが明久は写真のないように驚きの声を上げ、

「日本に帰って来る時に玲が俺の部屋に置いておいたみたいでな。そのまま、持って帰ってきたんだよ。別に良いだろ。減るわけでもないし」

「減るからね！？　僕の尊厳とかいろいろなものが！？」

蓮夜は明久と瑞希の様子にくすりと笑うが明久はそれどころではないようで声をあげる。

第３９問

「姫路さん、どうかしたか？」

「……いえ、いろいろと負けた気がして」

蓮夜が作った夕飯のメニューはカレーライス、ポテトサラダ、卵スープのシンプルな夕飯であったが瑞希は味を見て１人でダメージを受けており、

「レン兄って料理、得意だった？」

「別に得意ってわけじゃないけどな。大学時代からは自炊だったし……玲に作らせると大変だったからな」

「……うん。姉さんに料理をさせたらダメだよね」

明久はあまり蓮夜の手料理を食べた記憶がないためか首を傾げると蓮夜は眉間にしわを寄せて玲には作らせるわけにはいかないと言い、明久は蓮夜の意見に大きく頷くと、

「あ、あの。久島先生、吉井くんのお姉さんに料理をさせちゃいけないって話ですけど、やっぱり、同棲していたんじゃないですか？」

「……いや、だから、どうして、そっちに話を持って行きたがるんだ？　今日も言ったけど、２人とも大学の寮に住んでたって行ってるだろ。寮は自炊だったし、１人暮らしすればわかると思うけど、１人分の飯を続けるのって疲れるんだよ。作った料理をなくなるまで食うとかしないといけないからな。材料を買うにもスーパーとか

は1人暮らしに優しい量で食材の販売はしてないからな」
「うん。わかる。同じ野菜を使って料理だとメニューが限られてくるし、少ししか使わないものでも1パックとか1袋だからね」
瑞希は蓮夜と明久の話にまだ、蓮夜と玲の関係を疑っているようで食い入るように聞くが蓮夜は玲との約束があるため、明久に玲と付き合っている事がバレないように話を逸らし、鈍感な明久は蓮夜の言葉のなかに見え隠れしている真実に気づく事なく頷いており、
「明久、今更だけど、お前、死んだ方が良くないか？」
「ちょっと、レン兄！？　その罵倒は何！？　流石に酷いよ！？」
蓮夜は鈍感すぎる明久を一先ず、罵倒してみると明久は驚きの声をあげる。
「いや、バカは死ななきゃ治らないって言うし」
「死んだら、終わりだからね！？　死んだら元も子もないからね！？」
蓮夜は明久を見ながらため息を吐くが明久は声を上げ、
「そうだな。お前の鈍感（バカ）さは1回や2回、死んでも治りそうにないな」
「あ、あの。久島先生、お願いがあるんです」
「ん？　いきなり、どうした？」

蓮夜は明久の場合は無駄だなと言い切った時、瑞希が何かを決心したような表情で蓮夜を呼ぶと、

「わ、私にお料理を教えてください」

「ひ、姫路さん？　と、突然、何を言ってるの！？」

蓮夜に向かって料理を教えて欲しいと頭を下げ、明久は瑞希の突然の行動に顔を引きつらせる。

「俺に教わるより、お母さんに習った方が良いだろ。俺は1人暮らしが長いから、それなりに作れるだけであって、長年、主婦をしている人には敵わないぞ」

「それが、お母さんがいる時に私がキッチンに入るとお母さんはお料理をさせてくれなくて」

「……そ、それはそうだよね。姫路さんの料理は危険すぎるから」

蓮夜は自分ではなく瑞希に母親に料理を教わるように言うが瑞希の料理には何かあるのか明久は顔を引きつらせており、

「ん。姫路さん、最初に聞いておくけど、料理をする時に薬品とか使おうとする人？」

「はい。隠し味には必要ですから」

「……レン兄、その質問はどうなの？」

蓮夜は明久の反応と瑞希の母親の対応から何かを感じ取ったようでおかしな質問を瑞希にしてみるが彼女の口からは常識では考えられない回答が返ってくるが、

「うん。そうだな。とりあえず、飯を済ませてから薬品を料理に使うのは止める事から始めるか」

「ど、どうしてですか！？」

「いや、驚く意味がわからないからな。えーと、まずは薬品の基本的な使い方から勉強しようか」

「久島先生、私が教わりたいのはお料理です」

「そうだとしても、姫路さんの場合はその前の段階からだな」

蓮夜は慣れているのか瑞希の回答から彼女に料理を教えるのに必要な学習計画を立てて始めるが瑞希（とうのほんにん）は状況を理解していない。

第４０問

「明久、姫路さんって、真面目だな」

「……そうだね」

夕飯を食べ終えると蓮夜はＦクラスの生徒達用に作成していた化学のプリントの束を瑞希に渡し、食器類を片付けていると瑞希はこのプリントが料理にどのように役立つのかは理解していないようだが彼女を突き動かす何かがあるのか瑞希は真剣にプリントと向き合っており、その様子に蓮夜は感心したように頷くと明久は真剣な表情の瑞希に見とれているのか反応は薄く、

「……初恋を引っ張るなら、告白くらいしておけよ。ヘタレ」

「な、何を言うんだよ！？　そ、それより、レン兄はどうして、姫路さんが料理に薬品を使うって気づいたんだよ」

蓮夜は明久と瑞希を交互に見た後、ため息を吐くと明久は顔を真っ赤にして慌て、話を逸らそうと蓮夜が瑞希の料理の特殊さに気づいた理由を聞き、

「最初は不味いだけかと思ったんだけどな。それなら、お前はあそこまで青くならないだろ。お前は女の子に甘いから多少、不味くても文句を言わずに食うだろうしな。それを超えた反応をしてれば疑問に思う。彼女の母親が料理を止める理由が不味いだけなら、教えないって事はないし、何より、キッチンに入れないって事は不器用で手を切るとか味付けの問題じゃない。それ以外の問題だ。例えば、何度、言っても洗剤で米を洗うとかな」

「なるほど」
蓮夜は苦笑いを浮かべながら瑞希がおかしな料理をしていると言う推測を立てた理由を話すと明久は頷くが、
「わからないのに理解したふりをするなよ」
「そ、そんな事はないよ」
蓮夜は明久が理解していないとわかりきっているようであり、明久を見てため息を吐くと明久は気まずそうに蓮夜から視線を逸らし、
「まぁ。最終的に薬品に落ち着いたのは……玲が一時期、似たような事をしたからな。俺の中での最悪を例に挙げてみたら、姫路さんが頷いたんだ」
「……レン兄、何か、本当にごめん」
蓮夜は少しだけ疲れたように笑うと明久は自分の姉である玲が蓮夜にかけている迷惑に顔を引きつらせながら謝る。
「まぁ、こんなところだな。姫路さん、ご両親は出かけるって言ってたけど、何時頃になる予定？」
「は、はい。１０時頃だと言ってましたけど」
「それなら、１人で留守番よりはしばらく、ここにいるかい？　それくらいになったら、車で送るから」

蓮夜は食器を片づけ終え、真面目にプリントを解いている瑞希に両親の帰宅時間を聞くと蓮夜は女の子1人を家に帰すのは不安になったようで瑞希にこの後をどうするかと聞くと、

「え、えーと、吉井くんはどうするんですか？」

「僕？　僕は」

「姫路さんが残るなら、強制的にいて貰う。帰るなら、明久もその時に送って行く」

瑞希は流石に教師とは言え、蓮夜と2人っきりは不味いと思ったようであり、明久に視線を向けるが明久は何も考えていなかったようであり、蓮夜は苦笑いを浮かべると明久には瑞希が帰る時間まで居て貰うと勝手に決め、

「ちょ、ちょっと、レン兄、僕にだって予定が」

「予定って言っても、帰って日が変わるまで、下手したら朝までゲームをやるつもりだろ……明久、そう言えば、玲に明久を大切な2つの約束をしてあると聞かされているんだけど、クラスメートの女の子とこの時間に一緒にいる事は玲にとっては不純異性交遊に分類されるか本人に聞いてみるか？」

「レン兄、それは脅しだからね！？　わかったよ。姫路さんが帰る時間まで僕もいるから、姉さんにだけは連絡しないでください」

蓮夜は明久の弱点を突くと明久は蓮夜に向かって土下座をし、結局、瑞希の両親の帰宅時間まで明久は蓮夜と瑞希の下で自習する事になった。

第４１問

「美味しい肉じゃがができます」

「残念、不正解」

「あう」

清涼祭１日目の朝、蓮夜は何とか見栄えだけは整えた教室で瑞希に『料理』の勉強を見ており、瑞希は自信ありげに答えるが蓮夜は笑顔で不正解と答え、彼女のおでこに軽くデコピンをすると瑞希はおでこを両手で押さえながら恨めしそうな表情で蓮夜の顔を見上げ、

「どうしてですか？　」

「決まってるだろ。調理の過程で王水が精製できるからだ。良いか。だいたい、薬品を保管・管理するのにはいろいろな手続きが必要なんだ。そんなものを持ち出すな」

瑞希は間違っていないと言いたげだが蓮夜は大きくため息を吐き、

「……明久、久島先生と姫路から、何やらおかしな会話が聞こえるのじゃが、どう言う事じゃ？」

「……姫路さんがレン兄の料理を食べて、この間、弟子入りをしたんだよ」

２人の会話に秀吉は顔を引きつらせると明久は苦笑いを浮かべながら、瑞希が蓮夜に料理を習っている事を話すと、

『姫路さんは俺のために肉じゃがと王水って言う料理を作ってくれるんだな』

『何を言ってるんだ。俺のためだ』

Ｆクラスの生徒達は王水が何かを理解していないようで瑞希が自分のために料理を作ってくれると勝手に思い込んで小競り合いを始めようとするが、

「……騒いでないで、準備の続きをする。時間がないんだぞ」

蓮夜は生徒達に遊ぶなとため息を吐くと蓮夜のため息に生徒達は血の気が引いてきたようで直ぐに準備に戻り、

「それじゃあ、次の問題だな。次を外すと１０問連続不正解と言う事でこれに着替えて接客をして貰う」

「く、久島先生、何を言ってるんですか！？　と、と言うか、どうしてそんなものを持ってるんですか！？」

「まぁ、気にするな。強いて言えば『明久の趣味』だ」

蓮夜はすでに悪のりを始めているようであり、瑞希に次の罰はチャイナドレスでの接客だと言うとチャイナドレスを瑞希に見せ、瑞希は恥ずかしいようで顔を真っ赤にすると蓮夜は表情を変える事なく、『チャイナドレスは明久の趣味』と言い切る。

「レン兄、いきなり、何を言うんだよ！？　それじゃあ、僕が変態みたいじゃないか！？」

「嫌いか？　チャイナ」

「もちろん、愛してる！！」

明久は慌てて蓮夜の言葉を否定しようとするが彼の本音を隠せるわけはなく、拳を握り締めて吠えると、

「……吉井くんがチャイナドレスが好きなら、次の問題はわざと間違えれば、吉井くんは何かを言ってくれるかな？」

「アキはチャイナドレスが好きなの？　それなら、最初の接客衣装を決める時に反対しなければ良かった」

瑞希と美波は明久をちらちらと見ながら何かつぶやいており、

「それじゃあ、時間もないし、姫路さん、最終問題だぞ」

「は、はい」

「硫酸銅五水和物を塩化バリウム水溶液に加えて加熱すると何が生成される。但し、硫酸銅五水和物を塩化バリウム水溶液は全て反応したものとする」

蓮夜は瑞希と美波の様子にくすりと笑うと瑞希にとっては料理の問題を出し、

「えーと、どうしよう？　これは『デミグラスソースの作り方』だけど、正解しちゃうと吉井くんの好きなチャイナドレスは着れないですし……ここはわざと間違えましょう」

「どうする？　時間切れにするか？」

「こ、答えます。硫酸バリウム、塩化銅、水の３つです」

「正解。よくできました。さてと、そろそろ、遊んでられないから、最終確認に入るぞ」

瑞希はわざと間違えようと決めたようだが蓮夜は正解と答え、中華喫茶の最終確認に移ろうと生徒達に指示を出すが瑞希のチャイナドレス姿が見れなくなった事にＦクラスの男子生徒は秀吉とこの場にいない雄二を抜かしてがっくりと膝を落とし、血涙を流している。

第４１問（後書き）

どうも、作者です。

蓮夜のプロフィールを書いていなかったことに気づいた作者です。

今更ですが、要りますかね？

必要だっていう人は感想欄にご一報ください。

第４２問

「ど、どうして、正解なんですか！？　今のは『デミグラスソースの作り方』のはずで！？　あ、あう」

「……間違っても、薬品からデミグラスソースはできないからな」

瑞希はわざと間違えるつもりだったため、蓮夜が正解だと言った事に驚きの声を上げた瞬間に、再び、蓮夜にデコピンを喰らい、瑞希はおでこを両手で押さえて涙目で蓮夜を見上げるが蓮夜は大きくため息を吐いた時、

「おい。何があったんだ？」

「ん。坂本代表、お帰り。まぁ、気にするな」

「うむ。気にせぬ方が良いのじゃ。それより、雄二はどこに行っておったのじゃ？」

雄二が教室に現れ、血涙を流しているクラスメート達の姿に首を傾げると蓮夜と秀吉は雄二にどこに行っていたかと聞き、

「あぁ。今日の召喚大会の日程表を貰ってきたんだよ。うちの参加者は姫路と島田は接客の要、俺は代表だしな。明久以外はそれなりに重要なポストにいるわけだしな。しっかりと見ておかなければ困るだろ。休憩時間のシフト変更もしないといけないしな」

「待て。雄二、僕だって清涼祭の実行委員だったはずだ」

雄二は召喚大会のトーナメント表を秀吉に渡すと召喚大会に出る４人の休憩時間を調節しないといけないため、面倒そうに頭をかくが明久は自分がないがしろにされていると感じたようで声をあげる。

「あれ？　アキと坂本、召喚大会に出るの？」

「うん。ちょっと、いろいろとあってね」

「島田さん、この間、勉強見てた時に明久と坂本代表が召喚大会に出るって話はしたよ」

「そうでしたっけ？」

明久が雄二に喰ってかかろうとした時、美波は２人が召喚大会に参加する事を聞き逃していたようで首を傾げると、

「それより、アキ。召喚大会に出るって事は優勝賞品のチケットは誰を誘うつもり？」

「ちょ、ちょっと、美波、どうしたの？　お、落ち着いてよ」

「吉井くん」

「姫路さん、助けて！？　って、どうして、姫路さんも僕の肩をつかむの！？」

瑞希と美波の２人は明久が優勝賞品である如月ハイランドのプレミアムチケットで誰を誘うか気になるようで背後からおかしな黒い気配を立ち上らせながら明久に詰めより、

「やれやれ。相変わらずの鈍さだな」

「久島先生、明久は昔から鈍かったのか？」

「鈍くなかったら、姫路さんと早いうちにまとまってバカさに愛想を尽かされてるくらいだろ」

「確かに、それは言えるのじゃ」

秀吉は蓮夜に明久の過去を聞くと蓮夜はため息を吐き、その言葉に秀吉は納得が行ったようで大きく頷くと、

「待て。姫路、島田。明久はペアチケットを取ったら。『俺』と行くつもりなんだ」

「え？　坂本とペアチケットで『幸せになりに』行くの？」

雄二は明久をからかいに走ったようであり、その衝撃的な言葉に瑞希と美波の表情には絶望の色が浮かび上がる。

「俺は何度も断ってるんだがな」

「アキ……あんた、やっぱり、木下より坂本の方が……」

「ちょ、ちょっと待って！！　そのやっぱりって言葉が凄く引っかかる！！」

「俺が学生の頃より、そっちに理解があるのか何と言うか」

本来、雄二の言葉を信じるわけがないはずだが、なぜか、瑞希と美

波はその冗談を真実のように受け止め、明久は2人を説得しようと慌てる姿に蓮夜は苦笑いを浮かべると、

「レ、レン兄、笑ってないで助けてよ！？」

「そうだな。まずは玲に明久が女の子にモテないから男に走ったと連絡した後に助けてやる」

「待って！？　それは被害が拡大してるから！？」

明久は蓮夜に助けを求めるが蓮夜はもう少し、この状況を楽しもうと思っているのか玲に連絡すると携帯電話を取り出し、明久は声をあげる。

第４３問

「仕方ないな。姫路さんも島田さんも落ち着け。坂本代表も悪のりが過ぎるぞ」

「……久島先生が言って良い事ではないと思うのじゃ」

蓮夜は冗談だと言いながら携帯電話を懐にしまうと瑞希と美波を止めるがその様子に秀吉は何か納得がいかないようで眉間にしわを寄せると、

「だいたい、明久は坂本代表より、巨乳のポニーテールな女の子を筆頭に女の子が好きだ」

「……久島先生、そのピンポイントな趣味は何なんだよ」

「そ、そうだよ。な、何を根拠にそんな事を言うんだよ」

蓮夜は明久は女の子に興味があると言い切り、雄二は蓮夜が例に挙げた女子像に眉間にしわを寄せるが明久は明らかに動揺しており、

「……久島先生、あんたはどうして明久の考えが手に取るようにわかるんだ？　会ったのは7年ぶりじゃなかったのかよ」

「ん？　経験に基づいた予想、後は坂本代表は黒髪ロングの見た目清楚系を好む」

「……確かに雄二から回ってくる保健体育の参考書はそれが多い」

雄二は明久の様子に蓮夜が明久の考えを読みきっている事にため息を吐くが蓮夜は明久だけではなく雄二の趣味まで暴露し、康太が蓮夜の言葉を肯定する。

「な、何を言ってるんだ！？」

「そ、そうだよ」

「明久も坂本代表もだけどな。動揺するとさらに見苦しいぞ」

明久と雄二は蓮夜が言った事は嘘であると言おうとするが明らかに動揺しており、蓮夜は2人の様子にため息を吐く横で、

「……巨乳」

「……ポニーテール」

瑞希と美波はお互いに明久の好みの部分を見てつぶやくと、

「アキ、坂本と行くんじゃないなら、誰と行くつもりよ！！」

「そうです。誰と行くつもりなんですか！！」

「だ、だから、どうして、そんなに2人ともそこに食いつくの！？」

2人で明久に詰めより、明久は驚きの声を上げる。

「えーと、えーと、そうだ。ペ、ペアチケットはレン兄のところのおじさんとおばさんにプレゼントするつもりなんだよ」

「久島先生のご両親にですか？」

明久は詰め寄る2人に何か嘘でも話を作り出さないといけないと思ったようで蓮夜の両親にプレゼントすると言いだし、瑞希は首を傾げると、

「こ、この間から、朝夕のご飯にお昼のお弁当まで作って貰ってるんだ。だから、そのお礼にしたいんだ。それで雄二に頼んだんだよ」

「久島先生のご両親にのう。それで最近の明久の血色は良いわけか」

「明久が弁当を持ってきてるのはおかしいと思ってたんだけど、そう言う事か」

明久は蓮夜の両親へと言い訳をはじめ出し、雄二と秀吉は最近の明久の体調の良さに納得したようで大きく頷き、

「明久」

「な、何？　レン兄」

「とうさんもかあさんもお前が真面目に勉強して成績を上げてくれた方が喜ぶと思うぞ。後は彼女（よめ）を連れてくるとかな。昨日も実の息子の事より、明久に彼女はいないのかと2時間も電話で聞かれたからな」

蓮夜は明久をからかう事が面白くなってきたようでもう1つ爆弾を投下し、

「あ、あの。久島先生、挨拶にはやっぱり、おかしは必要でしょうか。それなら、私、頑張って作ります」

「……姫路さん、まずは前提を踏んでからにしてくれ。それと勘違いしてるけど挨拶に行く先は本来、明久の両親にだからな」

瑞希はおかしな殺(や)る気を出し始め、蓮夜は自分の両親が毒殺されるわけにはいかないためかため息を吐くと、

「明久、坂本代表、そろそろ1回戦の時間だろ。こっちはやっておくから、行きなさい」

「お、おう。明久、行くぞ」

「うん」

蓮夜は時間を確認して明久と雄二に召喚大会に向かうように言い、2人は教室を出て行く。

第４４問

「それじゃあ、私はＦクラスの様子を見に行ってきます」

「久島先生、悪いですが任せます。あいつらは目を放すと遊んでいる可能性がありますから」

蓮夜は校内の見回りの仕事の時間になっていたのだが西村教諭からＦクラスの監督を任され、西村教諭に頭を下げて教室に向かって歩き始め、

（……文月学園は試験校だけど進学校としても名前が売れてきてるし、Ｆクラスさえ押さえれば特に大きな騒ぎにならないか？　まぁ、始まったばかりだしな。揉めるのは他校生が入ってきてからか）

清涼祭の様子を眺めながら歩いていると旧校舎に入った時に、

「マジ、きったねえ机だな！！　これで食べ物を扱っても良いのかよ！！」

（……考えてるそばから揉めてる声が聞こえるな。急ぐか）

Ｆクラスの教室から揉めているような声が聞こえ、蓮夜は急いで教室のドアを開ける。

「はい。君達、静かにしなさい」

「あ？　お前誰だよ。俺達は本当の事を言ってるんだ。こんなきったねぇ教室で食い物屋をやって良いのかって話をしてるんだ。部外

者がしゃしゃり出てくるんじゃねえよ！！」

蓮夜は騒ぎたてている2人の男子生徒に声をかけるが蓮夜の赴任は全体朝礼で発表になったわけでもなく、蓮夜の授業のないクラスは教師として蓮夜を認識していないようで2人組は蓮夜を威嚇するように怒鳴りつけるが、

「3年Aクラスの夏川と常村だな。生徒指導室に行こうか？」

「は？　部外者にそんな事を言われる筋合いはねえよ」

蓮夜は2人組の態度に額に青筋を浮かべながらも教師として冷静を保ちながら2人組の名前を呼ぶが2人組は自分達の名前が呼ばれた事にも気付いていないようであり、蓮夜をバカにするように笑い、

「責任者はいないのか！！　このクラス代表は」

「坂本代表は召喚大会に参加しています、ですから『副担任』の私が話を聞くと言ってるんだ。お前ら、人の話を聞く気があるのか？」

代表である雄二を呼べと叫んだ時、蓮夜の目つきは鋭くなり、

『総員撤退！！　お客様を避難させろ！！』

『あの2人組はバカよ。西村先生と同程度の強さを持ってるって噂される久島先生にケンカを売るなんて』

Fクラスの生徒達はお客の誘導に移り、お客として着ていた2年生達はすでに蓮夜の話は伝わっているのか3人の周りは蜘蛛の子を散らしたように人が引いて行く。

「く、久島先生？」

「はい。先日から臨職ですが文月学園に席を置いている教師です。そうですよね。教頭先生」

２人組は周りから聞こえる声に顔を引きつらせると蓮夜はお客のなかに竹原教頭がいる事を抜け目なく見つけ、わざとらしく竹原教頭に声をかけると竹原教頭は蓮夜の行動が気に入らないようであるが頷き、

「何の目的があってこんな事をしたか。話して貰おうか？　教頭先生もこの２人の話を聞いてください」

「そ、それはこんな設備で飲食店をやるって言うからよ」

「そ、そうだ。食中毒が起きたら学園の問題になるだろ」

蓮夜は竹原教頭がＦクラスの教室から出ようとしているのを見て声をかけると２人組にＦクラスの喫茶店の邪魔をした理由を聞く。

第４５問

（……まぁ、衛生面については問題があるとは言われる可能性は有ったけど、それより、問題はこの２人は教頭側の人間って事だな。わざわざ、その様子を見にくる教頭もあまり賢いとは言えないな）

蓮夜は２人組の会話を聞きながら、２人組は時折、竹原教頭に助けを求めるような言動が混じっている事に気づき、３人の浅はかさに少しだけ呆れたようだが、

「その件ですが、ウチのクラスはしっかりと掃除をしましたよ。学園から売上を設備向上に使っても良いと言う許可が出ていますから、それこそ、売上を上げるために全員が真面目に取り組みました。それを難癖付けてバカにするのはいただけないですね。飲食店をやると言う事もありますからね。掃除の状況を西村先生や他の先生方にも確認してもらい、今の状況でなら問題ないと許可もいただきました。そうですよね。教頭先生？」

「……そうですね」

蓮夜は学園側から許可が出ている事を竹原教頭にわざとらしく確認を取り、良いのがれができないように２人組の逃げ道を潰して行き、

「だ、だからと言って使い古した段ボールがテーブルって事はないだろ」

「そ、そうだ。こんなきたねぇものを使うんじゃねえよ」

２人組は竹原教頭を味方に付けようと段ボールのテーブルが問題だ

と叫びだし、

「そうですね……確かにこれは問題かも知れないですね」

蓮夜はその言葉に少しだけ考えるような素振りをすると2人組は蓮夜の変化に勝ったと思ったようで小さく口元を緩ませる。

「教頭先生、確かにこれは問題ですから、学園にある来客用のテーブルを借り受ける許可をいただけないでしょうか？　文月学園はスポンサーからの融資で成り立っている試験校ですし、スポンサーから苦情が出ては学園の問題になりかねません」

「しかし、それは学園の方針に……」

しかし、蓮夜はその一言を待っていたのか、竹原教頭に学園の備品の貸出をお願いするが竹原教頭はあまり良い顔はせず、

「そうですか？　教頭先生『の』権限で許可できないなら、学園長先生にお願いしてきます」

「……反するとは思いますが飲食店となると衛生面は考えないといけませんね。わかりました。許可を出しましょう」

「ありがとうございます。教頭先生、お前らも教頭先生の寛大な処置にお礼を言うんだ」

蓮夜は今の状況を見ている生徒達に竹原教頭の力のなさを見せつけるように学園長に直談判をしに行くと言うと竹原教頭は蓮夜のペースに巻き込まれている事に感情を隠す事なく苦虫をかみつぶしたような表情をしながら許可を出し、蓮夜はわざとらしくFクラスの生

徒に竹原教頭にお礼を言わせ、

「そ、それじゃあ、俺達はもう良いな。俺達の『助言』でテーブルが手に入ったわけだし」

「だ、だよな」

2人組は竹原教頭が言いくるめられた事に自分達が不利な状況だと気づいたようでゆっくりと後退しようとするが、

「待ちなさい。君達がやったのは助言ではなく誰の目から見ても明らかな営業妨害です。後輩達の邪魔をして彼ら達をバカにするのは最上級生であり、文月学園の模になるべきの3年Aクラスの行動ではありません。後輩達の清涼祭の思い出にキズを点けた事は謝るべきです。そうですよね？　教頭先生」

「……そうですね」

蓮夜はまだ2人組の処罰は終わっていないと彼らの首をつかむと2人組が3年Aクラスの生徒だと言う事を逆手に取り、その言葉に多くの生徒達は頷き始め、竹原教頭は忌々しそうに頷き、

「な、何で、俺達が」

「そ、そうだ」

「そうですか？　反省する気がないようですので竹原教頭、この2人を生徒指導室に連れて行きますので先ほどのテーブルの件をお願いします。何人かテーブルの移動に行ってくれ。後は坂本代表に状況説明も任せるぞ」

２人組は竹原教頭に助けを求めるような視線を向けるが現状で竹原教頭にはこの２人を助けるのはデメリットしかないようであり、２人組を助ける事はなく、蓮夜の手によって生徒指導室に連行されて行く。

第４６問

「誰だい？」

「久島です」

「入りな」

蓮夜は２人組を西村教諭に預けた後、中華喫茶のゴマ団子を手に学園長室をノックすると中から入室の許可があり、

「失礼します」

「何の用だい？　あたしは忙しいんだよ」

蓮夜が学園長室に入ると学園長は白金の腕輪の修理をギリギリまでやっているのか忙しそうにパソコンのキーボードを叩いている。

「えーと、これ、ウチのクラスの喫茶店のおススメ料理です。施設の向上許可のお礼と言っては釣り合わないかも知れませんけど」

「……本当に抜け目のない男さね。まぁ、学生が出すと考えるとそれなりだね」

「学園長先生が食べるようなお店と比べられては困りますよ」

「まぁ、冗談さね。充分に美味いよ」

蓮夜は学園長の前にゴマ団子を置くと学園長は小さく口元をほころ

ばせた後に悪態を吐くが蓮夜の言葉に小さくため息を吐き、

「それで、あんたの事だ。用件はこれだけじゃないんだろ」

「まぁ、少しだけ」

蓮夜に学園長室を訪れた理由を聞き、蓮夜は先ほどFクラスの教室で起きた営業妨害の件を報告する。

「……ずいぶんとちゃちな嫌がらせだね」

「そうですね。念には念を入れてと考えているようですけど、大成する人間にしては余裕がありません。そんな事をやらなくても普通に考えれば明久と坂本代表では召喚大会を優勝できる成績ではないんですから、余裕を持って行動するべきですね。余裕がないと何かあった時に対応も保身もできなくなりますから」

「あんたも言うね」

学園長は竹原教頭が学生2人を使って仕掛けてきた事に呆れたようで大きく肩を落とすと蓮夜は苦笑いを浮かべ、学園長は蓮夜の態度に感心したように頷くと、

「しかし、あんたがここにきて、竹原に目を付けられないかい？」

「それなら、先ほど教頭先生にもゴマ団子を持って行って学園長先生に設備向上許可の件もお礼をしてきますと言ってきましたから」

「……やる事が大胆だね」

「私には後ろめたい事は何1つとしてありませんから、あくまでも教頭先生にはテーブルを貸していただけたお礼を持って行き、学園長先生には設備向上のお礼をしに来ただけです」

学園長は蓮夜が竹原教頭に目を付けられた可能性があると思ったようだが蓮夜は大胆にも学園長室を訪ねる事を竹原教頭に放しており、学園長は眉間にしわを寄せるが蓮夜はくすりと笑った後、

「後は一応、これを仕掛けさせて貰っても良いですか？」

「何だい？　これは……久島先生、あんたはどうしてこんなものを持ってるんだい？」

懐から小さな機械を取り出し、学園長は蓮夜が取り出した物に心当たりがあるようで眉間にしわを寄せるが蓮夜は気にした様子もなく、

「ちょっと、あれだけ迂闊な人間が相手だと言う事は力づくで来そうなのでこっちもそれなりに対応をしないといけませんからね。ちなみにこれはちょっとした友人に借りました」

「……あんたの交友関係が気になるところだけどね」

「本当は教頭室にも盗聴器を仕掛けたかったんですけど、それは犯罪ですからね。これで盗聴は防げますね」

蓮夜は学園長室に盗聴防止の対策をして行き、学園長は蓮夜の様子に大きく肩を落とす。

第４７問

（……ん？　今度は何の騒ぎだ？）

蓮夜が学園長室から戻ると教室からは騒ぎ声が聞こえ、蓮夜は急いで教室のドアを開けると雄二と小さな女の子をＦクラスの生徒が囲んで騒いでおり、

「坂本代表、何があったんだ？」

「あぁ。久島先生、お疲れ。いや、何かこのチビっ子が人を探しているみたいなんだけど、特徴が」

「お兄さん、『バカなお兄ちゃん』を見ませんでしたか？」

蓮夜は雄二に声をかけると雄二は小さな女の子の人探しの手伝いをしていたようで雄二が蓮夜に状況を説明していると蓮夜の顔を見上げながら、女の子が探している人物の特徴を話すが、

「……正直、多すぎてわからないな。この学年だけでもないだろうし、３年はＦクラスに固まってるだろうけど１年生なら点在しているからな」

「だよな」

蓮夜は眉間にしわを寄せて女の子の上げた特徴だけではわからないと言い切り、雄二は苦笑いを浮かべると、

「その……すっごくバカなお兄ちゃんだったんです」

「ランクが上がったな」

「だけど、誰かわかったな」

女の子は少し考えた後にバカさを強調し、蓮夜と雄二だけではなく女の子を囲んでいた生徒達も1人の人間だと確信したようで、

「明久、呼んでるぞ」

「ちょっと、待ってよ。レン兄もみんなもどうして僕だって決めつけるんだよ！！　絶対に人違いだよ！！　見てよ。バカは僕だけじゃなく、この教室には溢れてるんだよ」

「あっ、バカなお兄ちゃんだ」

蓮夜は直ぐに明久を呼ぶと明久は絶対に自分ではないと叫ぶが明久の思いとは裏腹に女の子は明久に抱きつき、

「絶対に人違いがどうした？」

「人違いだと良いな……」

雄二は女の子の様子に明久に聞くと明久は涙を流す。

「とりあえず、関係ない人は解散。遊んでないで接客をする。土屋くん、ゴマ団子、1つ。この子に」

「……了解」

蓮夜は女の子の周りに集まっている生徒を解散させると厨房に女の子の分のゴマ団子を頼み、

「明久、店の真ん中だと邪魔だから端の席に移動するぞ」

「う、うん。わかったよ。レン兄」

「お兄さんはバカなお兄ちゃんのお兄さんですか？」

蓮夜は明久と女の子に移動するように言うと蓮夜と明久の様子に蓮夜の顔を見上げて明久との関係を聞くと、

「まぁ、そんなようなものだな。久島蓮夜です。このクラスの副担任をしています」

「先生ですか？　葉月は島田葉月です」

「島田？　葉月？」

蓮夜は女の子に名前を名乗ると女の子は『島田葉月』と名乗り、蓮夜は葉月の顔を見る。

「どうかしたですか？」

「葉月ちゃん、お姉ちゃんもこの学校にいないかい？」

「いるです。先生、凄いです」

蓮夜は葉月の顔と名前から美波の妹だと思ったようで葉月に確認すると葉月は蓮夜を尊敬するように目を輝かせ、

「ウチのクラスの生徒だからね」

「えーと、レン兄、それってこの子は美波の妹って事？」

「そう言う事だ」

「うむ。そう言われると面影はあるのう」

「そうだな」

蓮夜と葉月のやり取りに一緒にいた明久、雄二、秀吉の３人は納得したのか大きく頷く。

第４８問

「それで、葉月ちゃんはどこで明久と知り合ったんだ？　明久は葉月ちゃんも知っての通り脳容量が少ないから3日前の事も覚えていないだろうから教えてくれないかい？」

「バカなお兄ちゃん、葉月の事、覚えてないですか？」

葉月を席まで移動すると康太が彼女の前にゴマ団子を置き、蓮夜は明久が葉月の事を覚えていないと判断して葉月に明久との出会いを聞こうとすると葉月は明久が自分を覚えていない事に目に涙を浮かべると、

「ゴメンね。明久はどうしようもないバカで愚図で不細工だから」

「明久……じゃなくてバカなお兄ちゃんがバカでゴメンな」

「バカなお兄ちゃんはバカなんじゃ。許してやってくれんかのぅ」

「バカなお兄ちゃん、ゴマ団子、食べますか？」

「あ、ありがとう。葉月ちゃん」

蓮夜、雄二、秀吉は葉月に泣かないように言うがその後ろで明久は予想以上のダメージに血涙を流し、あまりの明久の惨めさに哀れになったようで葉月は泣きやみながら明久にゴマ団子の皿を差し出す。

「……明久、お前、情けないな」

「い、言わないでよ」

「それで、葉月ちゃん」

蓮夜は明久の様子にため息を吐くと改めて、葉月に明久との出会いを聞くと、

「はいです。葉月はバカなお兄ちゃんと『結婚の約束』をしました」

「そうか。ちょっと待ってくれるか……葉月ちゃん、今、何年生？」

「葉月は小学5年生です」

「6才差か……未成年同士だと問題ないのか？　やっぱり、警察に連絡した方が良いのか？」

葉月の口から出た言葉に蓮夜は少し考えると蓮夜もそれなりに動揺は隠せないようであり、懐から携帯電話を取り出し始めるが、

『吉井があのロリっこに手を出しただと？』

『……許せん。吉井を血祭りにあげるべきだ』

それ以上にクラスメート達は殺気だっており、

「ちょ、ちょっと待ってよ！？　僕は結婚の約束なんて！？」

「瑞希！！」

「美波ちゃん！！」

明久はクラスメート達の殺意に怯んだ時、タイミング悪く瑞希と美波が教室に戻ってきたようで背後に真っ黒な殺意をまとって明久の命を狩るために明久に向かい駆け出す。

「殺るわよ！！」

「はい！！」

「……はい。小さな子供の前でおかしな行動をしない」

2人の殺意をまとった拳が明久の顔面を撃ち抜こうとするが蓮夜は2人の行動にため息を吐きながら、明久との間に割って入ると彼女達の拳を受け止めるが、

「久島先生、放して、ウチはアキにお仕置きをしないといけないのよ。このバカに反省させるために、土屋、包丁を持ってきて、5本もあれば足りるわ！！」

「土屋くん、私の分もお願いします！！」

「死ぬからね！？　包丁は1本でも致命的だからね！？」

彼女達の怒りは収まる事はなく、さらに過激さを増して行き、

「島田さん、妹さんが遊びに来てますよ。落ち着きなさい」

「へ？　葉月が？」

「お姉ちゃん、葉月、遊びにきたです」

蓮夜は2人の様子に自分が止めるよりは美波の姉としての自覚に期待したようで葉月が遊びに来ている事を伝えると美波は我に返る。

第４９問

「葉月？　お姉ちゃん？　……あっ、思い出した。あの時のぬいぐるみの女の子」

「思い出してくれたですか？」

「うん。久しぶりだね。葉月ちゃん」

明久は美波と葉月が話す様子に少し考えると葉月との出会いを思い出したようでポンと手を叩き、葉月は嬉しそうに明久の顔を覗き込むと明久は葉月の頭を優しく撫で、

「あれ？　アキ、あんた、葉月と知り合いなの？」

「うん。去年、ちょっとね」

「はいです。葉月、バカなお兄ちゃんと結婚の約束をしたです。それに葉月の初めても」

美波は妹である葉月が明久と知り合いの事に首を傾げると葉月は大きく頷いた後に頬を赤らめて意味深な事を言い、

「明久、ちょっと話をしようか？」

「ちょ、ちょっと待って！？　レン兄！？　ご、誤解だから、落ち着いて！！」

蓮夜は葉月の話を信じると事が事のためか眉間にくっきりとしたし

わを寄せ、明久の肩をつかみ、明久は蓮夜の様子に自分の命が風前の灯火だと理解できたようで慌てて弁明を始め出す。

「大丈夫だ。俺は落ち着いてる」

「な、なら、僕の肩をつかんでる手を放して！？　折れるから、レン兄の力でつかまれたら僕の骨なんか簡単に折れちゃうから！？」

「……大丈夫だ。回答次第では２度くっつかないように粉々に砕いてやる」

明久は軋む自分の骨の痛みに悲鳴をあげるが蓮夜の目はすでに怪しい光を灯しており、

「あれだな。姫路や島田の攻撃力もけた外れだが、久島先生の攻撃力だと本当に明久の骨は粉々になりそうだな」

「雄二、そんな事を言ってないで助けてよ！？」

雄二は明久の生命のピンチなど何とも思っていないようで興味無さそうに仕事に戻ろうとすると明久は雄二に助けを求め、

「知るか」

「久島先生も落ち着くのじゃ。まずは明久の話を聞くのじゃ」

「待って。秀吉！？　みんなも助けてよ」

「……自分の命が優先」

雄二は明久を突き放すと秀吉は蓮夜に落ち着くように言うが蓮夜の攻撃力を警戒しているようであり、蓮夜と明久の周りからは一気に人が退いて行く。

「坂本代表、少しの間、明久を借りて行くぞ」

「あぁ」

「ちょ、ちょっと待って！？　ご、誤解だから」

蓮夜は明久の首根っこをつかみ、中華喫茶を出て行き、廊下には明久の叫び声は遠くなって行き、

「とりあえず、仕事に戻るか？」

「そ、そうね……葉月、アキに初めてって言ってたけど」

「はい。葉月、バカなお兄ちゃんに初めてほっぺにキスをしました」

雄二は遠くなって行く明久の叫び声を聞かなかった事にしようと決めたようで何事もなかったかのように仕事に戻るが美波は明久と葉月の間に何があったかと聞くが別段たいした事ではなく、

「何じゃ、その程度の事か」

「ふむ。それなら、明久も直ぐに帰ってくるじゃろうに」

雄二と秀吉は呆れたようなため息を吐くが、

「……土屋、やっぱり包丁を用意しておいてくれる？」

「土屋くん、私の分もお願いします」

「……心配するな。1人1本がノルマ」

瑞希と美波だけではなく、Fクラスの男子は雄二と秀吉を抜かした全員が明久に殺意を向けている。

第５０問

「と言う事で僕は葉月ちゃんに手など出していません！！」

「……明久、本当だろうな？」

明久は蓮夜に生徒指導室に連れて行かれると床で土下座をしながら葉月と出会った時の経緯を詳しく説明をすると蓮夜は眉間にしわを寄せたまま、明久に聞き返し、

「久島先生も落ち着きなさい。吉井くん、今の言葉に嘘はないですね？」

「は、はい。ないです。僕は葉月ちゃんには手を出してません」

「久島先生、君は嘘を吐いてなどいないのに教師に疑われる辛さもわかるはずです。吉井くんが君の弟のような存在とは言え、今の君はやり過ぎです」

生徒指導室には福原教諭もいたようで２人の様子に蓮夜をなだめ、

「……そうですね。すいません」

「謝るのは私にではありませんよ」

「明久、悪かった」

蓮夜は福原教諭の言葉に冷静になろうとしたようで大きく息を吸い込んだ後に福原教諭に頭を下げるが福原教諭は謝るのは自分ではな

いと蓮夜に言い聞かせるように言うと蓮夜は明久に頭を下げる。

「う、うん。大丈夫だよ。レン兄は僕の事を思って怒ってくれたわけだし」

「そうですね。吉井君も観察処分者になった時の理由も聞かせていただきましたが、もう少し考えて行動する事、君の行動は久島先生の立場を悪くすると言う事も覚えておいてください。久島先生は君にとっても本当のお兄さんのような存在なんですよね？」

「は、はい。気を付けます」

明久は蓮夜の様子に安心したようだが、福原教諭は同席した事で明久が観察処分者になった理由も理解したようで明久に今後の行動に付いて考えるように言うと明久はそこで自分の行動次第で蓮夜の立場が悪くなる事を初めて理解したようで大きく頷き、

「それではお話はこれくらいにしましょう。久島先生、持ち場に戻ってください。吉井君も教室に戻って良いですよ」

「はい。本当にすいませんでした」

「わかりました」

福原教諭は明久の返事に優しげな笑みを浮かべると2人に戻るように言い、2人は頭を下げると生徒指導室を出ると、

「明久、悪かったな」

「もう、良いよ。それに直ぐに説明できなかった僕にも問題があっ

たわけだしさ。それより、戻ろう。レン兄がいないとみんな、遊び始めそうだし」

「そうだな」

蓮夜と明久は2人で教室に戻ろうと歩き始めた時、

「久島先生、良いところに」

「工藤さん、どうかしたか？」

蓮夜を見つけた愛子が駆け寄ってくる。

「Aクラスはメイド喫茶をしてるんですけど、さっきからおかしな2人組が来てて、Fクラスの悪口を言ってるんです。先輩みたいで僕達も強く言えなくてうちの売り上げにも響きそうなんです」

「2人組？」

「レン兄、ひょっとして、さっき、僕らのところにもきてたって言う2人かな？」

愛子は迷惑なお客が来ているため、教師を呼びに行く途中だったようであり、蓮夜に今のAクラスの状況を説明すると蓮夜と明久は2人組に心当たりがあるようであり、

「わかった。それじゃあ、行こうか？」

「ありがとうございます」

蓮夜は愛子の頼みに頷き、愛子は本当に困っていたようで深々と頭を下げ、

「明久、俺はAクラスに行ってくるから」

「僕も行くよ」

「そうか？　工藤さん、行こう」

「はい」

3人はAクラスのメイド喫茶に向かって歩き始める。

第５１問

「この店はきれいで良いなぁ。さっきのＦクラスの中華喫茶は酷かったぜ」

「だよな」

３人がＡクラスのメイド喫茶『ご主人様と御呼び』のドアを開けると店の中心部から先ほどＦクラスで騒ぎたてていた２人組が愛子の言っていた通り、Ｆクラスをバカにして高笑いをしている。

「愛子、待ってたわよ。西村先生は捕まった？　……久島先生に吉井くん？」

「優子、ごめん。すぐに対処して欲しかったから、久島先生がそこにいたから」

愛子が戻ってきた事に優子は本当に困っているようで直ぐに駆け付けてくるが西村教諭を期待していたようで蓮夜を見て、少し考えるようなしぐさをすると愛子は苦笑いを浮かべ、

「そ、それに久島先生の攻撃力は西村先生と同程度だって噂だし」

「……レン兄、そんな噂になってるんだね」

「いや、打撃系とスピードでは良いところまで行けると思うけど西村先生はタフだし、何発入れれば倒せるか予想ができないし、まず、寝技も持ち込まれると勝てる気がしないな。何より、西村先生はあの『ジョルジーニョ＝グラシェーロ』と対等に戦える人だ。捕まっ

たら終わりだ。そうなると」
愛子は蓮夜が化け物じみた強さだと言うと明久は眉間にしわを寄せ、その隣で蓮夜は真剣に西村教諭とのマッチアップの時の事を考え始めており、
「……久島先生、それは良いから、あの2人を止めて欲しいんですけど」
「そうだったな。ちょっと行ってくる」
優子は蓮夜の様子に大きく肩を落として2人組をどうにかしろと言うと蓮夜は我に返り、中央の席で騒ぎたてている2人組の元に歩いて行く。
「大丈夫かな？」
「吉井くん、久島先生って強いんじゃないの？」
「強いって表現をどこまでつかって良いかわからないけど、高校時代は実戦空手で付けるヘッドギアを素手で割ってた」
「……それは逆にあの2人組が心配ね」
明久は2人組に近づく蓮夜の様子に少しだけ心配そうに視線を向ける様子に愛子は首を傾げると明久は2人組の命を心配しており、優子の顔は明久の口から出た言葉に顔を引きつかせると、
「そんなにFクラスの中華喫茶は酷かったんですか？」

「当然だろ。Ｆクラスだぜ。頭もわりいし、味もわりい。あんなバカどもと同じ学校にいるのが恥だぜ」

「ホントだぜ。あんなおんぼろの設備で喫茶店をやる神経が信じられねえぜ」

蓮夜は眉間にしわを寄せながら、２人組に声をかけるが２人組はＦクラスをバカにする事が楽しいようで話しかけたのが蓮夜だと気付かないで高笑いをあげている。

「……そうですか？　私としては先ほど、西村先生にも注意されたにも関わらず、反省する事なく、他のクラスで同じ事をしている最上級生の方が恥ずかしいと思いますよ」

蓮夜は落ち着いた口調で２人組に改めて声をかけると蓮夜の声に２人組は気が付いたようであり、まるで、壊れた玩具のようにぎこちない動きで蓮夜の方を振り向き、

「げっ！？　お前はさっきの臨職！？　なんで、こいつが？　こいつはＦクラスから出ないはずだろ」

「ちっ、夏川、逃げるぞ」

２人組は蓮夜の顔を見るなり、逃げだそうと走りだそうとするが、

「逃げる？　それはどう言う事だ？　お前達は自分達の意志でＦクラスをバカにしたんだろ？　なら、その責任はお前達が取らないといけないんだ」

そこで蓮夜の怒りは最高潮に達したようであり、剛音とともにそこ

には真っ二つに割れたテーブルが床に転がっており、2人組はその様子に顔を引きつらせるだけではなく足がすくんでしまったのか動きを止め、

「……あの2人組、死ぬわね」

「そうだね」

優子と愛子は蓮夜の破壊力に顔を引きつらせる。

第５２問

「ただいま」

「お、明久、帰ってきたか……久島先生はどうした？」

明久は教室に戻ると雄二は蓮夜が一緒に戻ってこない事に首をかしげる。

「……レン兄は今、福原先生に怒られてるよ」

「待て。状況がまったくわからん。わかるように説明しろ」

明久は２人組を再度、生徒指導室に引きずっていったのだが、Ａクラスでのテーブル破壊の件で福原教諭に怒られているようであり、明久は視線を逸らすがその一言では絶対に状況は伝わらず、雄二は眉間にしわを寄せて再説明を求め、

「えーとね。さっき、ＡクラスでＦクラスの営業妨害をしてる２人組がいたんだけど」

「待て。その２人組って、さっき、ウチでも騒いでたって奴らか？」

「うん。それでレン兄、怒ってさ……テーブルを叩き割った。キレイに真っ二つに」

「テーブルが真っ二つですか？　先生凄いです」

明久は蓮夜がテーブルを叩き割ったところを思い出してようで顔を

引きつらせながら答えると、Ｆクラスの生徒達はその時の流れは想像できなかったようだが埃が舞う中、蓮夜がテーブルを叩き割った姿は目に浮かんだようであり、全員が動きを止めるが葉月はあり得ない状況に目を輝かせている。

「……待つのじゃ。明久、状況がまったくわからんのじゃ。どんな事が起きたらテーブルが真っ二つになるのじゃ」

「えーと、前に打ち抜くより、インパクトの瞬間に拳を止めたら良いって聞いた事がるよ。僕は割れると思わないんだけど」

「明久、テーブルの割り方じゃないぞ」

秀吉は顔を引きつらせながら明久に状況を確認しようとするが明久は何を勘違いしたのか首をかしげ、雄二は大きく肩を落とし、

「あ。そうだ。牛の角を折るより、バットを折る方が難しいとも言ってた」

「……久島先生は牛の角を折った事があるのじゃろうか？」

「秀吉、考えるのを止めろ。引き返せなくなるから」

明久は余計な事を思い出し、明久の話が耳に入ったＦクラスの生徒は関わってはいけないと判断したようで仕事に戻って行き、

「明久、久島先生の攻撃力に付いてはどうでも……良くはないが今はどうでも良い」

「そうだね。えーと、結局は懲りなかったからしいけど、その２

人組がここで騒いでいた時の状況も知らないしね」

「それもそうじゃのう。まぁ、同じ事をやっていると言うのが1番なんじゃろう」

雄二は改めて、蓮夜の攻撃力の高さを実感したようであり、触れる事を拒絶すると明久は蓮夜があそこまで怒っている理由はわからないようであり、首を傾げると、

「そうだね。ただ……レン兄の土下座は見事だったよ」

「……久島先生が土下座だと？」

「うん。テーブルを壊した事を福原先生に報告する時のね。僕も雄二も鉄人に何度も土下座してるから、土下座には自信あるけど……レン兄の土下座は芸術の域に達してるかも知れない」

「……今、考えれるのは久島先生も土下座慣れしてるか」

「……相手が福原先生だからかわからぬのう」

明久の言葉に雄二と秀吉は福原教諭の謎が増えるだけである。

第５３問

（……売り上げが落ちてるな。まぁ、学祭だし、他にも見て回るところもあるしな。仕方ないか？　後は注意したとは言え、２度の営業妨害にも原因があるかな？　また、無いとは言えないから注意はしないと）

蓮夜は福原教諭への報告が終わると教室に戻り、喫茶店の手伝いをしているのだが最初より、売り上げは落ちてきている。

「ただいま」

「ん？　ずいぶんと早かったな」

「あぁ。なんか、対戦相手が食中毒で不戦勝になってな」

そんななか、召喚大会３回戦に向かっていた明久と雄二が教室に戻ってくると２人は不戦勝で直ぐに帰ってきたと言うが、

「……ウチの客ではないじゃろうな？」

「……レン兄がいない間に姫路さんが厨房に入ったって事はないよね？」

「それが１番、可能性があるな」

秀吉は食中毒と聞き、表情を曇らせると明久と雄二は瑞希が厨房に入った可能性を危惧する。

「一応は姫路さんは厨房に入れない事は最重要事項として通達したけど……ウチのクラスはバカだからな。姫路さんがお願いしたら簡単に落ちそうだ」

「……否定できなくて怖いな」

「そうだね」

「うむ」

蓮夜は瑞希の料理の危険さを知っているためか既に手は打っているようだが、それでもクラスの男子生徒達は信用に足らないようで眉間にしわを寄せると3人は眉間にしわを寄せて頷き、

「ま、今は考えても仕方ないか？　秀吉、状況はどうなっている？」

「うむ。今は落ち着いているのじゃが……」

「さっきより、お客さん、減ってるね。飽きられちゃったかな？」

雄二ははっきりとしない事に時間をかけていても仕方ないと思ったようで秀吉に客入りの状況を聞くと秀吉は減っている客入りに苦笑いを浮かべると明久は首をひねる。

「まぁ、ウチは女子が姫路と島田と秀吉の3人だけだからな。下心で集まる男達の客はいないしな」

「待つのじゃ！？　ワシは男なのまかせてじゃ」

「後は営業妨害の影響もあるだろうな」

「久島先生も軽く流さんで欲しいのじゃ！？」

雄二は女っ気がない事も原因だと言うがその言葉の中には秀吉をからかう言葉が混じっており、秀吉は声をあげるが蓮夜は営業妨害の影響も出ていると話し、

「それもあるか？　それなら、何か売りになるものも考えないといけないか？」

「雄二、何かアイデアはある？」

「任せておけ。中華とこれは安直過ぎる発想だが、効果は絶大なはずだ」

雄二は首をひねるとチャイナドレスを取り出す。

「ほう。若干、裾が短いような気もするが、これならばインパクトはあるじゃろうな。これを宣言用に」

「ああ。これを『明久』が着る」

「ちょっと待った！？」

チャイナドレスを見て秀吉が頷くと雄二は飛んでもない事を言い始め、当然、明久は驚きの声をあげるが、

「まぁ、それはインパクトはあるな。明久、女装も学祭の醍醐味だ。頑張れ」

「ちょっと待って！？　レン兄、ここは止めるところだろ！！」

「大丈夫だ。写真を撮って玲に送ってやるから、玲はきっと大喜びだ」

「姉さんにそんなものを送ったら大事だよ！？　だいたい、僕はチャイナドレスなんか着ないよ」

蓮夜は明久を応援するが明久は絶対に着たくないと叫ぶ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8230x/

僕と幼なじみな新任教師？

2012年1月14日20時50分発行